
イナズマイレブン Ω

sasami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブン Ω

【Nコード】

N2125T

【作者名】

sasami

【あらすじ】

どこかの荒地地である少年が起きた。その少年は生き残るために自然の中でどんどん力をつけていった。

1話

眼を覚ますと、荒れ地に俺は捨てられていた。

「……ここはどこだ？」

まだ俺は、小さい子供だ…なのになぜこんなところに捨てられて
いる？

「……全然わからない…」

とりあえず、どこかにいこう。そう思った時、ふと俺は思った。

「俺の名前は何か？俺はいつたい誰なんだ？」

・・・考えていても埒が明かない…とりあえず、前に進もう…

それから数カ月がたった。生き残るためには、必ず食べなければい
けない。そうして俺は自然に鍛えられながら、どんどん力をつけて
言った。

2話

あれから数カ月がたった。文字は街にあった文字を理解して覚えた。食料も補充は十分ある。お金は犯罪者などを捕まえてだいぶ稼いだ。そろそろこの町を出るか。

結局、自分の名前は決めていない。というかあまり興味がない。

バサッ・・・

「・・・鳥か。」

よく見ると足に紙が巻いてある。それを取って読んだ。

『私をここから連れ出してください。』

ただそれだけ書かれていた。何のことか全く分からない。とりあえず書かれている場所へ行ってみる。

「ここか・・・」

随分とでかい屋敷だ。

「ん？誰だね、君は？」

自分をえらく見せるために随分と長くした髭の男が出てきた。

「この紙に書いてある場所がここなんですけど。」

「！！この紙は！？・・・あいつめ！・・・君はもう帰りました。」

「えっ。あの・・・」

「帰れと言ってるんだ！！」

髭の男は怒鳴り、紙を握りつぶし、屋敷の中へ戻って行った。

やはりあの紙のことが気になる・・・俺は屋敷に入りこんだ。

屋敷に入ると、独房のようなものが見えた。隙間から中を覗き込んでみると、小さい女の子がいた。

「・・・誰？」

「この紙のこと知ってるか？」

「・・・その紙は私が出したものよ。」

「そうか。それじゃ、出してやる。」

「待つて！！もしばれたら、御父様に怒られる！！」

「御父様？」

「私がここに閉じ込められてる理由は、前にもここを抜けだそうとして連れ戻されたから……。」

その後も何度も抜け出そうとしたわ。でもみんな失敗。」

「……。」

「その紙を出したのも、もう5カ月も前。その間も抜け出そうとして、失敗した。やっぱり無理なの。」

「そうか。それじゃ、お前はずっとここに居たいのか？」

「居たくないよ……御父様は周りの人を侮辱してるし、こんなところ、1日も早く出たいよ。」

「居たくないんだな？」

「……うん。」

「それじゃ、俺についてこい。。。」

ガンッ！！

「えっ!?!」

「居たくないんだろ？」

「……うん!?!」

その日、俺はその女の子を連れだした。

「ここまで来れば大丈夫か？」

「ありがとう・・・あの、あなたの名前は？」

「俺に名前はねえよ。」

「ごっごめんなさい。」

「気にしないでいい。ところでお前は？」

「アイリス。」

「アイリスか・・・いい名前だな！よろしくな！」

「・・・うん！」

3話

アイリスの父親は、何度も逃走していたアイリスに呆れて探す気も失せたらしい。

ちなみに今はギリシャという国にいるらしい。

「ねえ、どこに行くの？」

「さあ？進める限り進むさ。」

「それ答えになってないよ？」

一応生活には困っていない。必要以上にお金があるから。

「そこのお前！！」

「ん？」

「だからお前だ！！俺と走りで勝負だ！！」

なんだこの青髪・・・

「んじゃ、ここからスタートな！」

「勝手に決めるな。」

「逃げんじゃねえ！」

「逃げてねえよ。」

「じゃあ、勝負しろ!」

「・・・はあ、わかったよ。」

「それじゃあ、位置について、よい・・・ドン!」

なんか始まった。

「へっ!オレの速さに追いついてこれ・・・ってえええ!」

「この程度か?」

「ふんんんんん!!」

「ゴール!」

「・・・俺より速い奴がいたなんて。おまえ、名前は?」

「ない。」

「ナイ?・・・変わった名前だな。」

「そういうことじゃなくて、この人本当に名前がないのよ。」

「そうなのか?」

「まあな。」

「んじゃどうでもいいか！お前についつていいか？」

「べつにいいけど・・・」

「んじゃ決定な！！俺の名前はゼファー！！よろしくな！！」

「随分大それた名前だな。」

「うるせえ！！」

なぜか、ゼファーがついてくることになった。

その後世界各地を回りながら、なぜかついてくる人数が増えていった。

ルナとソル、カルラにアスタリ、シリウスとサーシャにボルテクス、バイスとバルキリーにハデスとパラディン、シュバルツとガイアとウラヌス、あと一人が入ってなんともすごい名前の奴ばかり一緒にきている。

皆がなぜか俺の名前を決めるとかい出し出した。んで、なぜか「オメガ」という名前になった。

そんなある日、ルナとソルがこう言った。

「「ねえ！サッカーしよ！！」」

そんなこんなで言いくるめられて、俺たちはサッカーを始めた。最初のころは一人を除いてみんな動きがぎこちなかったけど、徐々にうまくなっていった。

〈数年後〉

「へえ、日本代表が優勝したんだ。」

「「ねえ、オメガ。この人たちとサッカーやってみようよ。」」

「大丈夫か？」

「「うん！ほかの国の人もやってみたい！！」」

「試合してくれるとは限らないけど、まあ頼んでみるか。」

いつかお前と戦える日を楽しみにしてるぞ。

円堂守。

4話

FFIEアジア予選に出場していたビッグウェイブスと試合を組むことができた。

「試合を受けていただきありがとうございます。キャプテンのオメガと言います。」

「変わった名前だね。私はロベルト・クライザー。よろしく。」

「では試合を始めますか。」

「ああ。ところで君たちのチーム名は？」

「あいつらがほとんどふざけて決めたんですけど、なぜか俺の名前の『オメガ』になったんです。」

「そうなのか。」

ビッグウェイブス フォーメーション

FW ジョーズ? リーフ?

MF シュリンプ? アングラー? ドルフィン? サーフィン?
ン?

DF ウォーター? ビーチ? タートル? クラーク

ン？

G K

ジンベイ？

オメガ フォーメーション

F W

ボルテ

クス？ ハデス？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？

アスタリ？

D F

サーシャ？ ガイア？

ウラヌス？

ゼファー？

G K

オメガ？

試合開始の笛が鳴った。ビッグウェイブスからのキックオフで試合が始まった。

「なんで10番がない？」

「ベンチで寝てる。気まぐれなんだよ。」

「舐められたものだな。」

「でもあいつにはオメガ以外勝てないよ？オメガと互角にやれるのもあいつだけだし。」

「あいつがどれほど強いのか知らないが先取点はもらっ！！ジョーズ！！」

「メガロドンV2！！！」

ジョーズが蹴ったボールに、サメが付いてきた。

「これで1点目だ！！！」

バシッ！！

「なんだと！？」

オメガは慌てる素振りもなく、片手でシュートを止めた。

「ゼファー！！！」

「おうよ！！」

「くっ！！ボックスロックディフェンス！！！」

ゼファーは周りを敵に囲まれた。

「遅い遅い！！！」

それをゼファーは、まっすぐ突っ走って通り抜けた。

「ボックスロックディフェンスがこんなに早く!？」

「ハデス!！」

ハデスにボールが渡った。

「はあ!！」

そしてそのままシュートし、ボールはゴールへと突き進んだ。

「グレートバリアリーフ・・・改!！」

ジーンが左手を振ると、地面から海水が噴出してきた。

しかしボールは止まらなかった。

「なに!？」

「ゴーーーーール!！」

「ただのシュートにグレートバリアリーフが・・・まだ手がしびれる。なんて威力だ!」

その後も一方的な試合が続き、試合終了時までビッグウェイブスは1点も取れず、圧倒的な敗北を喫した。

ビッグウェイブス 0 VS 84 オメガ

「試合をしてくれてありがとうございました。」

「いや、こちらこそありがとう。自分たちはまだ強くなる必要があると、改めて思い知らされたよ。」

「では、また機会があればもう一度。」

「ああ、次こそは俺たちが勝つ!!」

俺たちの初試合は勝利で終わった。

5 話

今日までアジア予選で負けていた目立たなかったチームとの試合が
終わった。

サザンクロス 0 VS 104 オメガ

レッドバイパー 0 VS 112 オメガ

ラストエンペラー 0 VS 107 オメガ

ザ バラクーダ 0 VS 132 オメガ

そして今日は、デザートライオンとの試合だ。

「試合を組んでくれたことを感謝します。」

「いえ、今までの試合結果を見せてもらったけど、すごい点差ね。」

「全員鍛えていますので。」

「そう、それじゃ、試合を始めましょう。」

「はい。」

デザートライオン フォーメーション

F W マジデイ？ ザック？

M F ユスフ？ スライ？ メッサー？ セイド？

D F ファル？ ビヨン？ ジャメル？ ムサ？

G K ナセル？

オメガ フォーメーション

F W パラディン？ ハデス？

M F ソル？ ルナ？

シリウス？ アスタリ？

D F サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファア？

G K オメガ？

試合開始の笛が鳴った。今回はこっちのキックオフから始まる。

「パラディン。」

「なんだ？オメガ？」

「やっていいぞ。」

「マジ！？よっしゃ、いくぞーーーー！！！」

そういうとパラディンは最初のキックオフでシュートを放った。

「キックオフシュートだと!?!」

「くそ! ストームライダー……V3!!」

ナセルが回転を始めると、それにつられて砂嵐が発生した。

しかしボールは勢いを落とさず、そのままゴールに突き刺さった。

「なんて威力だ……だがここから巻き返せば!!」

次はデザートライオンからのスタート。ディフェンダーのビヨンがゴールまで上がってきた。

「真ミラージュシュート!!」

塵気楼が発生したせいか、ボールが二つに分裂した。

バン!!

しかしオメガは片手で止めてしまった。

「そんな……俺の必殺技が!!」

結局その後、やはり一方的な試合が続き、今までにない点差で試合が終了した。

デザートライオン 0 VS 216 オメガ

「ありがとうございました！」

「まさか俺たちの戦略が一切通じないなんてな。だが次は勝たせてもらう。」

「ああ、じゃまたな！」

6 話

「本日は試合を申し込んでいただきありがとうございます。」

「……………」

「あの……ジンソン監督？」

「……………」

「……何かしましたか？」

「いえ、お気になさらずに。監督は無口なもので。私はキャプテンのチェ・チャンスウと言います。」

「よろしく願います。ではそろそろ試合を始めますか。」

「そうしましょう。しかし気を付けてくださいね？フィールドには、龍がいますから。」

「そうしておきます。」

ファイアドラゴン フォーメーション

F W バーン？ アフロディ？ ガゼル？

M F ペクヨン？ チャンスウ？ ウン
ヨン？

D F ウミヤン？ ドウユン？ ミヨンホ？ ソンファン？

G K

ジョンス？

「ふあゝゝあ。よく寝た。」

「起きたか、イヴァン。試合だ。入るか？」

「試合か・・・分かった出るよ。」

オメガ フォーメーション

F W

イヴァン？

ハデ

ス？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？

アスタリ？

D F

サーシャ？

ガイア？

ウラヌス？

ゼファー？

G K

オメガ？

試合開始の笛が鳴った。ファイアドラゴンからのキックオフ。

「はっ！てめえらがどんな奴らか知らねえが、燃やし尽くしてやる
！！」

そう言いながらバーンが上がってきた。

「アトミックフレアー、V3!!!」

バーンが蹴ったボールは炎を纏いながら、こっちに飛んできた。

それをいつも通り片手でキャッチするオメガ。

「俺のシュートが!？」

「シリウス!!」

「おう!!」

「なかなかやるようですね…。ではこちらも見せてあげましょう!!」

・・・必殺タクティクス!!!パーフェクトゾーンプレス!!!!」

チャンスウがそういうと、ファイアードラゴンの選手がシリウスを中心に回転を始めた。

「これは!？」

驚いているシリウスは、隙を突かれてボールを取られてしまった。

「しまった!!」

「涼野!!」

「ノーザンインパクト・・・V3!!」

涼野の蹴ったボールは氷を纏いながら飛んできた。

しかしそれも片手でキャッチされた。

「私の技もだど!?!」

「アスタリ!!」

「ああ!!」

「いかせません!パーフェクトゾーンプレス!!!!」

「しまった!!」

またもボールを取られてしまった。

「アフロディ!!」

「真・・・ゴッドノウズ!!」

今度はアフロディの背中に翼が生えて、空中からエネルギーの塊を纏ったボールが落ちてきた。

だが当然の如く片手で止められてしまう。

「これでもダメか…なら!!」

「サーシャ!!」

「おう・・・」

その瞬間、ボールはバーンに取られてしまった。

「行くぞガゼル!!」

「わかっている!!」

そう言つて、二人は空高くジャンプした。

「真・・・ファイヤーブリザード!!」

二人の足が炎と氷を纏い、それらを纏った足で同時にシュートした。

オメガは片手でボールを止めようとした。しかし威力が強く簡単には止まりそうにない。

「うおおおお!!」

ボールは無事止められた。しかし、少し後ろに押されてしまった。

「なに!?!」

「ガイア!!」

「任せとけ!!」

次はアフロディがインターセプトした。

「またか！」

「違うね！ゴッドブレイク（G5）・・・はあああ！！！！」

さっきのゴッドノウズと違い、今度は金色の翼を生やし、エネルギーの塊が凝縮され、アフロディの空中でのかかと落としてこちらに向かってきた。

「うおおおおお！！！」

先ほどと同じように後ろに押されながらも片手でシュートを止めた。

「なるほどこれでもダメか…なら・・・」

「ウラヌス！」

再びアフロディにインターセプトされてしまった。

そしてアフロディがもう一度ゴッドブレイクの体勢に入った。

そして後ろから、バーンとガゼルが加わってきた。

「カオス…ブレイク！！！！G5」

ファイアブリザードとゴッドブレイクが合体したシュートがこちらに向かって飛んできた。

「うおおおおお！！！」

片手だけで押さえて途中爆風が発生した。

そこから出てきたのは、両手を使ってボールを止めたオメガが立っていた。

「「「なんだと!!?」」」

「イヴァン!」

この試合始めてイヴァンにボールが渡った。

「いかせませんよ!!パーフェクトゾーンプレス!!!」

再びパーフェクトゾーンプレスが発生し、イヴァンを包囲した。

だがイヴァンはなんと空中へジャンプしてパーフェクトゾーンプレスを脱出した。

「やらせねえよ!」

脱出した矢先に出てきたのはバーンだった。バーンは空中でボールを奪おうとした。

だがイヴァンはボールを自分の手足のように扱い、軽くあしらった。

「なんだと!?!」

そしてそのままシュートをした。

「大爆発・・・」

キーパーが技を発動する前に、ゴールにボールが深く突き刺さった。

そして試合が終了した。

ファイアードラゴン 0 VS 63 オメガ

「まさかパーフェクトゾーンプレスがたった一人で破られるとは思いませんでしたよ。ですが次に戦うときは、負けるつもりはありませんよ?」

「ああ、その時はまた。」

「では。」

7話

「こんにちわ。ナイツオブクイーンのカプテン、エドガー・バルチナスです。」

「こちらこそ。オメガのカプテン、オメガです。」

「チーム名と同じ名前か…。珍しいね…。ところであそこのレディ達は、マネージャーですか？」

「いや、あいつらも選手だ。」

「そうですか。なら彼女たちも試合に出してみては？」

「それでいいか？アイリス、バルキリー。」

「私はいいですけど…。」

「わたしもかまわないよ。でもあんたはどうするのさ。あんた、わたしと同じGKじゃん？」

「安心しろ。俺はMFに入る。俺はこのポジションでも行けるかな。力を制限するためにゴールキーパーのポジションにいるようにしているからな。」

「いつも手加減してたの！？」

「言ってなかったか？」

「言っていないですよ!~!」

「まあそういうことでいいな?」

「はあ、んじやいいわー。」

「では始めましょう。」

ナイツオブクイーン フォーメーション

F W エドガー? フィリップ?

M F ピーター? ゲイリー? エリック? ポール?

D F ジョニーG? デービッド? ランス? エッジ?

G K フレディ?

オメガ フォーメーション

F W パラディン? ハデス?

M F ソル? ルナ?

 オメガ? アスタリ?

D F サーシャ? アイリス? ウラヌス? ゼファア?

G K

バルキリー？

「失礼かと存じ上げますが、『パラディン』ということは、もしやあなたはイギリス出身ですか？」

「そうですね？」

「それはよかった。今度時間がある時に何かお話でもしませんか？」

「機会があればよろしく。」

試合が始まった。こっちからのキックオフだ。

「レディファーストということで、そちらからどうぞ。」

「それじゃお言葉に甘えて、はああああ・・・」

アイリスが力をためていく。たちまちアイリスの周りから香しい香りがしてきた。

「パフューム・バスター！！」

アイリスの足に纏われていた香りが、ボールに勢いをつけてボールとともにゴールに向かっていった。

「この香りは…ラベンダーの香り！？」

「ラベンダーだけじゃない…様々な花の香りがする・・・！！」

まあ・・・アイリスの必殺技はいろんな花の香りがするからな！。

俺には分かんが・・・。

「真ガラティーン!!」

フレディの右腕から巨大な剣が現れ、それを振りおろした。

「うっうっうおおおおおおああああああ!!!!」

しかしボールは止まらず、ゴールに突き刺さった。

「まさかレディに先取点を取られるとは…しかし私たちもただやられはしませんよ。」

次はエドガーがボールを取った。

エドガーの周りにナイツオブクイーンのメンバーが集まり、エドガーを囲みながら突っ込んできた。

「必殺タクティクス、無敵の槍!!」

無敵の槍が発動している最中に、オメガは横から無敵の槍に突っ込み、反対側からでてきた。

そして無敵の槍が終わった時、

「ボールが・・・ない!!」

「ハデス!!」

いつのまにかボールはハデスにわたり、ゴールに入っていた。

「無敵の槍を発動しているあの一瞬で、ボールを奪ったというのか！！」

そして再び、ナイツオブクイーンのボールからスタートし、エドガーにボールが渡った。

「まだ私にはこれがある！！」

エドガーがシュート体勢に入った。

「真エクスカリバー！！」

エドガーの足から天にもとくほど巨大な剣が現れ、ボールに向かって振り下ろした。

「ヴァルキリア・ランス！！」

バルキリーの右手から巨大な槍が現れ、ボールを突き刺した。

「エクスカリバーが！」

「サーシャ！！」

「ハデス！！」

ハデスがシュート体勢に入った瞬間、エドガーがボールを奪い取った。

「真エクスカリバー！！！！」

エクスカリバーは距離が遠ければ遠いほど威力が増す変わった技だ。

（この威力はさすがにバルキリーには無理だな…俺が止めるか。）

ゴール直前でオメガがエクスカリバーを相手ゴールに向かってはじき返した。

「直接はじき返すだ！？」

跳ね返されたエクスカリバーはそのままゴールに突き刺さり、ゴールを後ろに飛ばした後、ゴールを倒した。

そして試合展開は変わらず、試合は終わった。

ナイツオブクイーン 0 VS 43 オメガ

「まさか無敵の槍があんな方法で破られるとは思いませんでした。」

「正直本番でできるかは自信なかったんですよ。」

「いえいえ、ご謙遜なさらずに。では、またいつか。」

「じゃーじゃー。」

8話

「おまえらか。FFIに出場してたチームに練習試合を挑んで、かなりの得点差で勝利しているチームってのは。」

ジ・エンパイアのキャプテン、テレス・トルーエだ。

「そうですが、なにか？」

「いや、そんなお前たちを倒せば、俺たちはさらに強くなっている
っていう証明になるからな。」

「では始めますか。」

「ああ。」

ジ・エンパイア フォーメーション

F W

レオーネ？

ディエゴ？

M F

エステバン？ セルヒオ？ パブロ？ ロベルト？

D F

テレス？ フリオ？

ゴルド？ ラモン？

G K

ホルヘ？

オメガ フォーメーション

F W

カルラ？ ハデス？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？

アスタリ？

D F

サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファー？

G K

オメガ？

ジ・エンパイアからのキックオフで試合が始まった。

そしてあつという間にシュートまで持ち込んだ。

「真ヘルファイア！！」

空中に上げたボールに下から横回転を加えて、再びボールをけり、ボールは炎を纏いながらこちらに向かってきた。

当然のように片手で止められる。

「サーシャ！！」

「オメガ！！たまにはお前もシュートしろよ。」

「・・・分かった。」

そういうと、オメガはシュート体勢に入り、そして蹴った。

「真アイアンウォール！！！」

テレスが両手を広げると、地面から鋼鉄の壁が出てきた。

「・・・なに！？」

しかしボールは勢いを止めることなく壁を砕いた。

「俺のアイアンウォールが！？」

「任せるテレス！はあああああああ、ミリオンハンズV3！！」

ホルヘが何もない所に張り手をしていると、無数の手の壁が出てきた。

「うをおおお！！」

ボールは勢いを止めることなくゴールに突き刺さった。

「・・・待てよ。」

「？」

「本気を出してみろよ。手を抜かれたまま負けるのは気に食わねえ！！」

「・・・なら少し本気を見せてやる。『見える』かは前次第だが・・・」

オメガにボールが渡り、そして・・・

「!!!!!!!!!!」

試合はいつも通り終わった。

ジ・エンパイア 0 VS 52 オメガ

「なんなんだ・・・あのシュートは…」

試合が終わった後にテレスが見ていたのは、

普段ゴールのあるべき場所から50Mほど後ろに飛ばされたゴールだった。

9 話

「HEY!! YOUは元気かい? MEの調子はGIN GINさ!
!ヒャッホー!!!」

「・・・」

「あまり気にしなくてもいい、俺はキャプテンのマーク・クルーガーだ。あつちはディラン・キースだ。」

今日はユニコーンとの試合なんだが…あのハイテンションについて行けそうにない。

「俺はオメガだ。」

「なかなかUNIQUEな名前だね〜!!」

「試合を始めるか。」

「ああ。」

ユニコーン フォーメーション

FW

ディラン?

ミケール?

MF スタイーブ?エディ?

マーク? ショーン?

DF テッド? トニー?

ダイク? ドモン?

G K

キッド？

オメガ フォーメーション

F W

シュバルツ？ ハデス？

M F

ルナ？

ソル？

シリウス？ アスタリ？

D F

サーシャ？

ガイア？

ウラヌス？ ゼファー？

G K

オメガ？

ユニコーンのキックオフで試合が始まった。

「いくぞ、デイルン！！」

「OK！マーク！！」

そう言って二人は高くジャンプした。

「真ユニコーンブースト！！」

二人が同時に蹴ったボールの後から、ユニコーンが付いてきた。

それを何事もなかったかのように片手で受け止めるが、地面に少し引きずられたような跡が残った。

「シュバルツ！」

「オメガ、技は使っているのか？」

「ああ。」

「よし！」

そういうと、シュバルツの周りに黒いオーラが現れた。

「ジェット・ブラック・・・はああああー！」

シュバルツが地面を思い切り踏むと、ボールが黒い衝撃波を纏いながらゴールへ向かった。

「フラッシュアップー・・・V3！ー！」

キッドがボールに合わせてアップーを繰り出したが、キッドを弾き飛ばしボールはゴールに突き刺さった。

試合はいつも通り大差で終了した。

ユニコーン 0 VS 47 オメガ

「カズヤが復帰したら、もう一度試合を頼んでもいいか？」

「ああ、大丈夫だ。」

10話

「俺はオルフェウスのキャプテンのフィディオ・アルデナだ。今日はよろしく！」

「こちらこそ、オメガだ、よろしく。」

当然わかんと思うが、今日はオルフェウスとの試合だ。今回は前回みたいなハイテンションがなくて助かった。

「それじゃ、始めるか。」

「ああ！お互い全力で楽しもう！！」

オルフェウス フォーメーション

F W

フィディオ？

ラフ

アエレ？

M F

アンジェロ？ ジャンルカ？ ダンテ？

ジョジョ？

D F

ベント？ オットリ？ ガッツ？ マルコ？

G K

ブラージ？

オメガ フォーメーション

F W

カルラ？

ハデス？

ソル？

ル

M F

ナ？

シリウス？

アスタリ？

D F サーシャ？

ガイア？

ウラヌス？

ゼファー？

オメガ？

今日はこっちからのキックオフが始まった。

「ソル！！」

「さっそくいくぞ！！必殺タクティクス、カテナチオカウンター！！」

フィディオが叫んだ途端に、ソルは周りを囲まれパスコースをも封鎖された。

そして、ソルはボールを奪われた。

「ラファエレ！」

フィディオが蹴りあげ、ボールがラファエレにわたる。

「真フリーズショット！！」

ラファエレが振り向くと地面が凍り、ラファエレはその上にボールを飛ばした。

それをいとも簡単に受け止めるオメガ。

「くそっ!!」

「ルナ!」

「カルラ!」

そして一気にゴール前までボールが移動した。

「行くぞ!!トリシューラ!!」

カルラが蹴ったボールが3方向に分かれ、再び一つになり威力を増してゴールへ向かった。

「真コロッセオガード!!」

ブラージが腕を広げると、背後からコロッセオが現れ、ボールと衝突した。

「うおおおお!!」

踏ん張るブラージ。しかしボールは無情にもゴールへ突き刺さる。

「まだまだ!まだ試合は始まったばかりだ!」

フィディオがチームを活気づける。それに呼応するかのようにオル

フェウスのチームメンバーは始まった時よりやる気に満ち溢れていた。

そしてフィディオにボールが渡り、

「真オーディンソード！！！」

フィディオのシュートに剣が付いてきた。

「うおおお！！！」

オメガは両手を使ってフィディオのシュートを止めた。

「シリウス！」

再びボールは中盤へと戻り、再び

「カテナチオカウンター！！！」

囲まれた。そしてフィディオが迫ってきた瞬間、

シリウスは、空中に飛び、それをよけた。

「カルラ！！！」

再びカルラにボールが渡り、そしてゴールした。

試合が終了し、スコアは以下ようになった。

オルフェウス 0 VS 42 オメガ

「ありがとう！おかげで楽しい試合ができたよ！」

「こちらこそ。」

「次は勝たせてもらっからな！」

「ああ。」

1
1
話

今日はザ・キングダムとの試合で今、そのキャプテンのマック・ロ
ーzioとの会話中だ。

「今日の試合、よろしく頼むぜ、ボーイ。」

「ああ。ところでそのボーイって呼び方はやめてくれないか？」

「ああ、悪い、よろしく頼むぜ、オメガ。」

「じゃあ試合を始めるか。」

ザ・キングダム
フォーメーションFW
レオナルド？ロニー？ジョ？ガト？

MF
プレザ?
ボルボレタ?
コルジア?

ラガルート？ バーグレ？ フォルミガ？ モンストロ？

G
K

ファルカオ？

オメガ
フォーメーション

FW
カルラ？
ハデス？

M
F

ルナ？

ソル？

シリウス？ アスタリ？

D
F

サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ゼファー？

G
K

オメガ？

ザ・キングダムからのキックオフが始まった。

「ガト！」

「通さん！」

パスを受け取ったガトにシリウスが迫る。

「スーパーエラシコV3！！」

ガトがボールを空中に蹴りあげ、そのまま左右に移動しシリウスを抜いた。

「ロニージョー！！」

そしてついにロニージョーにボールが渡る。

「行くぞ、ボーイ！！」

「だからボーイって言うな。」

「ストライクサンバV3!!」

ロニージョがボールをはさみ回転を加え、そして空中でけりを加えた。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!」

すさまじいシュートにオメガは片手でボールをはじいた。

「今だ!!」

すかさずロニージョがシュートをつつ。

「させるか!!」

そのシュートを、オメガは止めた。

「ゼファー!!」

ボールはゼファーに渡った。

するとゼファーを囲うように、竜巻が発生した。

「ゴッドブレス!!」

ゼファーがボールをけると、それについて行くように竜巻がボールの通った後を削りながら進んだ。

「カポエイラスナッチV3!!」

ファルカ才が側転をしながらボールを止めに行った。

しかしボールの後の竜巻が後押しをして勢いをさらに強め、ゴールへ突き刺さった。

「やるな、だがこちらにも負けないぞ!!」

再び、ザ・キングダムからのスタート。

「行くぞ皆！！」

「
「
「
「
「
「
おおつ
！
「
「
「
「
「

ロニー・ジョが呼びかけるとザ・キングダムメンバーがロニー・ジョを中心に並んだ。

「必殺タクティクス、アマゾンリバーウェーブ!!」

並んでいた選手が前後に移動しながら突進してきて、後から波が押し寄せてきた。

そして再び、ロージョがシュートに移る。

「ストライクサンバV3!!」

「今度は止める!!」

再び両手でシュートを受け止めるオメガ。しかし勢いがまだ残って

いる。

「なら、これでどうだ!!」

オメガはボールを片手でささえ、そして離していたもう片方の手でボールを思い切り殴った。

「何!？」

ボールはそのままゴールへ向かった。

「くっ!!カポエイラスナッチV3!!」

しかしボールはファルカオが技を発動する前にゴールに入った。

「なるほど、なかなか強いんだな。だが、まだ勝負は終わっていない!!」

そして試合は続いた。

試合が終了した時、オメガとロニージョは握手をしていた。

「世界にはまだ、お前たちみたいな強い奴らがいるんだな。だが俺たちもまだ強くなる。だから次戦うときは、今回みたいにはいかなーいからな。」

「その時を楽しみにしておく。」

ザ・キングダム

0

V
S

3
5

オメガ

12話

「キミ達がオメガか・・・今日はみんなで楽しもう!」

今日はリトルギガントとの試合だ。

「お主らがFFIに出場したチームを大量得点差で倒してきたチームか・・・まあ今日は楽しめ!!ズドーンとやってバーンと言ってドババーンといけ!!」

「・・・悪いがロココ、この人はいったい何を言ってるんだ?」

「ちょっと僕にもわからないや! ダイスケの言ってることはたまにわからなくなるからね。」

「ぐわっはっはっはっは!!とにかく楽しんだもの勝ちじゃあ!! はっはっは!!」

「・・・じゃあ試合を始めるか...。」

「うん、そうだね。」

リトルギガント フォーメーション

FW ゴーシュ? ドラゴ?

MF シンティ? ユーム? キート? マキシ?

D F ウィンディ？ウォルター？ ジニー？ マロン？

G K

ロココ？

オメガ フォーメーション

F W

イヴァン？ ハデス？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？ アスタリ？

D F

サーシャ？ ガイア？ウラヌス？ ゼファア？

G K

オメガ？

今日は俺たちからのキックオフでスタートした。

「ソル！」

「ルナ！」

「ハデスー！！」

あっという間にボールはゴール前まで運ばれた。

「はああー！！」

ハデスのシュートはリトルギガントのゴールに迫っていった。

「タマシイ・ザ・ハンド（G3）！！！！」

ロココが両腕を開くと胸のあたりから巨大な赤い手が現れ、ハデスのシュートを止めた。

「くそっ！！！」

「ジニー！！！」

「ユーム！！！」

「ドラゴ！！！」

そしてリトルギガントの連続パスでボールはオメガのほうへ向かってきた。

「吹っ飛べ！！ダブル・ジョーV3！！！」

ドラゴがボールに下から上、そして上から下の二つの回転を加えそして蹴られたボールはジグザグにゴールに向かった。

「はああああ！！！」

オメガは両手でダブル・ジョーを止めた。

「何！？！」

「シリウス！！！」

そしてボールは再び真中へ。

「ソル、ルナ！」

そしてボールは二人にわたり、

「行くぞ、ルナ！」

「うん、ソル！」

「「サンアンドムーン！！！」」

二人がボールをけり上げると、ソルが先に飛び、その後にルナが飛んだ。そしてソルがかかと落とし、

ルナはオーバーヘッドで同時にシュートした。

「タマシイ・ザ・ハンド（G3）！！！」

再び巨大な手が現れた。しかし今度は止まることなく、ゴールに突き刺さった。

「タマシイ・ザ・ハンドがこんなに早く破られるなんて・・・すごい！！マモルとやった時以来だ！！！」

今度はリトルギガントからスタートした。

「エアライドV3！！！」

ゴーシュが蹴ったボールにマキシがサーフボードのように乗り、デ
イフェンスをかわす。

そして今度はゴーシュとユームが交互にパスを出しながら進んでき
た。

「デュアルストライクV3!!」

高速でパスされ続けたボールが二つに分裂する。そして分裂したボ
ールをゴーシュとユームがシュートする。ボールはゴールに向かう
最中に一つになり、威力を増した。

そして後ろに引きずられながらもオメガは両手で止めた。

「チツ！次は決める！」

「おまえが来い、ロココ!!」

オメガがボールをロココに向かって投げつけた。

ドオオオン!!

「なんてパワーだ。よしそこまでいうなら!!」

ロココが前に出てきた。

そしてロココは前かがみになり、

「XブラストV3!!」

ジャンプして交差していた足でボールをけり、ボールとXの形をしている光線が飛んできた。

「すごい威力だな！ロココ、お前の技を真似させてもらおう！！」

「何！？」

「タマシイ・ザ・ハンド（G3）！！！」

オメガはさっきロココがやった技を完璧にコピーした。そしてボールを止めた。

「一体どうやって！？」

「俺は1度見た技を自分の技として使うことができる。小さい頃にいろいろと大変だったからな。」

そして、オメガはXブラストの態勢に入った。

「まさか！？」

「XブラストV3！！！」

ロココが撃ったそのままの動作でボールが飛んでいく。

「くっ！タマシイ・ザ・ハンド（G3）！！！」

ロココがまた巨大な手を出した。しかし威力は劣らずロココを退けた。

「うわあああ!!」

「悪いな、お前の技を借りたみたいで。」

そして試合が終了し、以下の結果となった。

リトルギガント 0 VS 30 オメガ

「いやゝゝはっはっは!!こんなに強いチームと戦えたとはな!!お前たち!まだまだ特訓じゃあ!!」

「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」「『はい!!』」

「試合をしてくれてありがとうございました。」

「行くのかい?マモルのところへ。」

「ああ。」

「用心しろよ!わしの孫はちょゝゝつよいからなあ!!」

「気をつけておきます。」

13話

〈韓国・とある空港〉

「いいか。これから日本に向かう。忘れ物はないか？」

「うん！」

「いつもホテルとかに泊まっているのに忘れものとかするか？」

「あれっ？手鏡どこに行ったんだろ……」

「まさかの忘れ物！？」

「ああそれなら、私が昨日借りっぱなしだった。はい、返すよ。」

「よかった。」

「驚かせるなよ全く……」

「て言うか、お金のほうは大丈夫なのか？」

「確かに……最近いろんな所を飛行機で移動してるからね……。」

「その事なんだが、実はだいぶなくなった。」

「おい、問題あるじゃねえか！！」

「だがあてはある。」

「どうするんだよ？」

「とりあえず宝くじというものをやってみる。」

「「問題才オアリじゃねえかああ！！！！」」

「そろそろ時間だ、早く飛行機に乗れ。」

「これから大丈夫かな……。」

く日本・北東京く

「ふあ~~~~あ、ん~~~~。」

「守~~~~！！そろそろ時間よ~~~~！！」

円堂は母親に起こされた。円堂は本日から3年生だ。

「守！あなたもう中学3年生なんだから、もっと早く起きなさい！！」

「分かったよ、母ちゃん。」

「そつえば、おじいちゃんから手紙が来てたわよ？」

「え？じいちゃんから？」

円堂は母親から手紙を受け取った。

「それで、なんて書いてあるの？」

「えーと、『超強いチームがそっちに行くから頑張れよ！』だつて。超強いチームかー！！一体どんな奴らなんだろうー！！うー！！わくわくしてきたー！！！」

「あつ！！ちよつと守ー！！！」

円堂は急いで学校に向かった。

（それにしても、じいちゃんが超強いっていうチームってどんぐらい強いんだろ？）

く日本・南東京・空港く

「やっと着いたか…日本。」

「おうえー。」「

「ガイア飛行機に乗るたびにそれはやめろ。」

「悪い。う、うえー。」

「で、これからどうするの？」

「言っただろ？宝くじ。」

「お願いだからもっとマシな方法を考えて！！？」

「で、その後どうするの？」

「とりあえず、編入できる学校を探そう。出るんだろ？フットボールフロンティア。」

そしてオメガ達は空港を出た。

14話

〔南東京〕

「・・・で、結局やるのか？」

「やらないと生活費に困る。」

サーシャはオメガを止めようとしていた。

「さすがに宝くじは当たらねえだろ・・・」

「成せばなる、だ。」

「そついうものなのか？」

ハデスが疑問に思った。ちなみに今オメガがやろうとしている宝くじはイナズマジャンボとかいうもので、只今キャリアオーバー中（？）で1等は6億だとか。

「俺はこれからの生活費の為に必ず1等を当てる。この為じゃないが、今まで鍛えられてきた直感でやれば・・・」

「当たるわけねえだろおおお！！؟؟？」

結局、オメガの直感を頼りに宝くじを一つ買った。大丈夫なのか？

〔北東京・雷門中〕

「それで円堂のおじいさんが言っていたその強いチームってのはいつ来るんだ？」

「それが分かんないんだよ。そろそろって書いてあるけど、もう2週間経ってるし・・・」

「一体どんなチーム何スかね？」

「もしかして、リトルギガントより強いでやんスか？」

「どうだろうな。腕になるぜ!!」

「キャプテン、そのチームが来たらどうするんですか？」

「きまつてるだろ！一緒にサッカーやるんだよ！」

「円堂らしいな。」

「ああ。」

15話

とりあえず宝くじで当てた金で家を買うことにしたが、

「雷門中とは全国大会の決勝で戦いたい！」

という意見が多かったので、雷門中と違う地区の学校に通うことにして、その近くに家を構えた。

「とりあえず編入という形でいいかね？」

「いいも何も実際編入ですから。」

「それじゃ来週から来てね。」

「はい。」

という感じで東海道地区の系川中に入ることにした。

「それじゃあ、雷門中に行ってみるか。」

「公式戦の前に1度やってみたいしね。」

16話

〔北東京・雷門中〕

雷門中サッカー部はグラウンドで練習していた。

「穴戸！」

「染岡さん！」

「ドラゴン・・・スレイヤーV3!!」

染岡の背後に竜が現れ、染岡のシュートと同時に光線を発射した。

そのシュートはゴールに深々と突き刺さった。

「いいぞ染岡ー!!」

「へっ!どうだ!」

「すみません。」

「ん?」

「練習試合を申し込みたいんですけど。」

「練習試合?」

「俺の名前はオメガ。」

「へえ、変わった名前だな。」

「自覚はしている。今年から系川中に入った。」

「系川中？鬼道、聞いたことあるか？」

「いや、ないな。」

「去年の地区予選で1回戦負けしたらしいからな。」

「そうなのか。じゃあさっそく試合やろうぜ！」

「いや、今日は練習試合の申し込みをしに來ただけだ。とりあえずそっちの監督と日程などについて話したいんだが……。」

「ああ、響監督ならこつちだ。」

「俺が監督の響だ。で、練習試合の申し込みか？」

「はい。そちらの日程が開いているときでいいのでお願いします。」

「わかった。では明後日でいいな。」

「はい、ありがとうございます。」

「明後日」

「じゃあ、試合楽しもうぜ!」

「ああ。」

雷門・フォーメーション

FW - - - - - 染岡? 豪炎寺?

MF シャドウ21 鬼道? マックス? 虎丸?

DF 栗松? 影野? 壁山? 風丸?

GK - - - - - 円堂?

オメガ・フォーメーション

FW - - - - - ボルテクス? ハデス?

MF ソル? ルナ?

シリウス? アスタリ?

DF サーシャ? ガイア? ウラヌス? ゼファー?

G K - - - - - オメガ？

「さあ〜！始まりました！雷門中対チーム・オメガ！実況はわたし角馬圭太でお送りいたします！」

実況までつけるのか。

「さあ、雷門中のボールでキックオフ！染岡と豪炎寺が相手陣内に切り込んでいく〜！！！」

「轟け！！ドラゴンスレイヤーV3！！！」

染岡の背後に竜が現れ、染岡のシュートと同時に光線が飛んでゆく。

「これがお前のシュートか。」

ドオン！

「なんとキーパーのオメガ、染岡のシュートをなんなくキャッチー
ー！！！」

「なんだと！？」

「シリウス！」

「チーム・オメガのシリウス、雷門陣内へ突入！！そこへ松野が迫る！！！」

「抜かせない！クイックドロウV3！！！」

マックスがスピードをつけて突っ込んできた。

「しかしシリウスジャンプして松野をかわした〜!!」

「行くぞ!」

シリウスはボールを高く蹴り上げ、自分自身も高く飛んだ。

「デルタブラスト!」

ボールを中心に三角形の形をした光線が飛んできた。

「シリウスの必殺技が、雷門ゴールを狙う〜!!」

「はああああ!!ゴッドキャッチ(G3)!!!」

円堂の背後にマントをつけた魔神らしきものが現れ、シリウスのシュートを止めた。

「これを円堂、ゴッドキャッチで危機を脱した〜!!」

「鬼道!!」

「通さないよ!!」

「鬼道にルナが迫る〜!!」

「真イリュージョンボール!」

鬼道が保持していたボールが3つに分身した。

「あっ！」

「鬼道、ルナを抜いた……！！！」

「豪炎寺！」

「真爆熱スクリュー……！」

豪炎寺が炎を纏い、そして回転して空中でボールを蹴った。

「豪炎寺の真爆熱スクリュー！これは決まったかー！？」

「はっ！」

「またもやオメガがそのままキャッチ……！」

「爆熱スクリューも効かないのか！？」

「ガイア！」

「オメガの投げたボールが、ガイアにわたる……！」

「はあっ！」

「なに！？」

「ここで虎丸がボールを奪った……！！！」

「豪炎寺さん……！」

「虎丸!!」

「タイガー……」

虎丸がタイガードライブを空に放ち、

「ストーム……V2!!」

豪炎寺が爆熱ストームを打ち込む。

「うおおおおお!!」

ドオオオオオン!!

「ゴーーーーー!!ル!!雷門、豪炎寺と虎丸のタイガーストームで先制点を取りました……!!」

「……ははは!こんな威力は初めてだ!いくぞお前たち!!」

「チーム・オメガのキックオフで試合が再開します!!」

「ボルテクス!」

「ボルテクスとハデスが、雷門陣内に侵入!同点なるか!??」

「いくぞ!!」

ボルテクスがボールを蹴り上げ、ボールを足に挟み回転を加えた。

「ジ・テンペスト!!」

ボルテクスはボールにかかと落としを決め、シュートした。

「ボルテクスの強烈なシュート!!これは止められるか!？」

「ザ・マウンテン!!」

壁山がジャンプして、落ちたと同時に山が反りたった。

「うわあああ!!」

「ゴッドキャッチ(G3)!!!!」

「円堂、ボルテクスのシュートも止めた——!!!!」

「なんて威力だ…。手が痺れてる。」

「次は決めてやる!!」

「マックス!!」

「ここでマックスにボールが渡った——!!」

「真クロスドライブ!!」

横に回転が加えられた後に、縦回転を加えたボールがゴールに迫ってきた。

「しかしオメガは普通にキャッチ!!」

「それじゃあ、俺も撃たせてもらおう。」

「まさかあそこから!？」

「タイガー…ストームV2!!」

「タイガーストーム!？」

「なんとオメガ、豪炎寺と虎丸の連携必殺技を1人で放った!!なんて威力だ!!!!!!」

「ザ・マウンテン!!うわあああ!!」

「ゴッドキャッチ(G3)!!!!」

「円堂、止めることができるか!!?」

「うおおおおお・・・うわああ!!」

「ゴーーーーール!!!!なんとオメガ、ゴールからゴールヘシュートを叩きこんだあ!!」

「ゴッドキャッチが破られた?なんて威力だ!」

「まだ試合は終わってないぞ?さあ、続けよう。」

17話

「さあ、再び雷門のキックオフで試合再開です！」

「虎丸！」

「はい！はああああ！！！」

虎丸の周りに7つの剣が現れた。

「グラディウスアーチ改！！！」

シュートとともに剣が向かってきた。

「オメガまたしてもキャッチー！！！」

「次はこれだ！！！」

オメガは前かがみになった。

「あれはロココの！」

「XブラストV3！！！」

「なんと！オメガがイナズマジヤパンの決勝戦の相手リトルギガンのキャプテンロココのXブラストを放ったーーーー！！！」

「ザ・マウンテンV2！！！」

「進化したか。だが!!」

「うわああ!!」

「はあああ!!ゴッドキャッチ(G3)!!」

「円堂!Xブラストを止めた!!」

「鬼道!」

「ここで円堂も上がっていく!!」

鬼道がボールを蹴りあげ、ボールが落雷とともに降りてきた。

「「イナズマブレイクV3!!」」

円堂、豪炎寺、鬼道が同時にシュートを放った。

「はあああ!!」

「ゴーーーーール!!雷門追加点!!」

「・・・はは!!やっぱりいいな!!イヴァンお前も出る!!」

「・・・俺も?」

「ああ!度肝を抜いてやれ!」

「ふぁ~~~~。わかったよ。」

「ここでチーム・オメガ、15番のボルテクスに変わって、10番のイヴァンを投入してきましたあ！」

未だ実力未知数のチーム・オメガ！反撃なるか！？そして再びチーム・オメガのキックオフで試合再開！」

「イヴァン！」

「ここでイヴァンにボールが渡る！おっ！？イヴァンまさかの単独で突入！！！」

「通すか！」

「染岡のスライディング！これをイヴァン、簡単にかわした……」

「なんだと！？」

「なら、これならどうだ！！！」

「鬼道がチャージにいった！！しかしイヴァンジャンプしてよけた……！！！」

「なら俺が……！」

「シャドウも飛んだ……！！しかしこれすらもたやすくよけた……！」

「オレが止めるでやんす！」

「栗松、イヴァンの着地を狙う！！それをイヴァン、地面に手をつけて再びジャンプ！」

「真コイルターン！」

「ここで影野の必殺技！だがイヴァンは止まらない！！」

「ザ・マウンテンV2！！」

「イヴァン、壁山をも抜いた~~~~！！そしてそのままゴールに向かう~~~~！！」

「通してたまるか！！」

「円堂前に出た~~~~！！」

「フツ……」

「なっ！？」

「なあと！？円堂までもが抜かれたあ~~~~！！ゴール！！イヴァン、7人を一人で抜いてそのままゴールにたどり着いた~~~~！！！！」

「なんてドリブルだ！全く予想できない！」

「再び雷門のキックオフ！」

「鬼道！」

「アスタリ！」

「了解！」

「ボールを持った鬼道に、アスタリが迫る――！！！」

「真イリユージョンボール！！」

「鬼道再びイリユージョンボールで抜い・・・」

「ヘキサ・クラッシュュ！！」

鬼道の周辺の地面が六角形に光り、そして爆発が起きた。

「うわっ！！！」

「アスタリ、鬼道のドリブルを止めた――！！」

「オメガ！」

「アスタリここで、キーパーのオメガにボールを戻します！」

「今度は真似じゃない、俺自身の技を見せてやる。『見える』ならな！」

「・・・なんとお！？オメガとボールが消えたああ！！！？？」

「消えただと！？」

「まさか？消えるわけないだろ？まあ、『消えた』ようには見えないけど？」

「そろそろ真中から離れたほうがいいぞ。危ないから。」

「危ない?」

「……イイイイイイ……」

「なんだこの音?」

「……イイイイイイイイ!!」

「!まさか!?」

ヒュン!!

ドオオオオオオン!!!!!!!!!!

「うわあああああ!?」

「一体何が起きたんだあああ!?フィールドから衝撃波が発生し、雷門のゴールが後ろに吹っ飛び破壊されているうううー!?!?!?」

「何なんだ一体!?」

「これが俺の必殺技、オメガ・ブーストだ。まあ、ネーミングはこいつらだな。」

「何をやったんだ!?」

「音速を超えながらボールを5回蹴る、これがオメガ・ブーストだ。」

」

「音速だと!？」

「ただ欠点があつてな? 威力が高すぎてゴールが壊れるからあまり使わないんだよ。」

「その代わり止めることができないけどね？」

「それじゃあ、試合を続けるか。」

その後、雷門中对チーム・オメガの試合は誰も予想だにしていなかった一方的に進んだ。

「な、なんということでしょう……。雷門サッカー部対チーム・オメガの試合は、2対25でチーム・オメガの圧勝という形に終わりました。」

「……………」

「雷門中の皆さん。練習試合を申し込んでいただきありがとうございます。」

「いや、こっちもいい経験ができただろう。ところでどうやってそ

「こまで鍛えた？」

「昔親に捨てられたもので、自然の中で虎に襲われたり、ライオンに襲われたりといういろいろ危なかったんで……。こいつらは世界中を旅してるときに出会った奴らです。」

「そ、そうか……。」「

「オメガ!!！」

「円堂……」

「お前のシユート今までの中で1番すげーや!!次は絶対俺たちが勝つ!!！」

「それじゃ、次は全国大会で会おう。」

「ああ!!！」

チーム・メンバー 紹介

オメガ

男 火属性 髪の色 右側が少し赤になっている黒 髪型 シャド
ウに近い

普通体型

ポジション どこでも

背番号 1

この小説の主人公。幼少期に親に捨てられたが探す気はなく、食料は自然で、財産は町でそれぞれ集めていた。4歳のころに最初にいた町を出てアイリスと出会う。その後も世界中を回りいろいろな仲間が集まった。

必殺技

スキル コピー 見た技を使用することができる。

シュート オメガ・ブースト 音速を超えて5回連続シュートする。
ロングシュート

???

???

アイリス

女 林属性 髪の色 茶髪 髪型 ロング

普通体型

ポジション D F

背番号 17

オメガが最初に出会った仲間。実家は貴族だが父親が自分以外を卑下するので嫌になって何度か脱走を図ったが、連れ戻されていた。その後諦めていたところをオメガと出会い、脱走に成功する。オメガに感謝の気持ちを抱いていて、恋愛感情がある。

必殺技

シュート パフューム・バスター シュートと一緒に花の香りを飛ばす。 ロングシュート

???

???

???

ゼファー

男 風属性 髪の色 水色で後ろが少し白 髪型 「イナズマGO」
の車田と同じ

普通体型

ポジション DF

背番号 5

ギリシャで出会った仲間。早さにこだわりがあり、初めて自分より速いオメガと出会い、一緒についていく。風が強いところが好き。

必殺技

シュート ゴッドブレス 竜巻の力でシュートの威力を上げる。
ロングシュート

スキル スピードプラス

???

???

ソル

男 火属性 髪の色 薄い赤 髪型 立向居と同じ

普通体型

ポジション MF

背番号 8

ルナの双子の兄。親が死んで路頭に迷っていたところオメガ達に会う。オメガの名前を決めようと言い出した本人で、とくに理由もなく決めた。サッカーが好き。ルナのことを大切に思っている。

必殺技

シュート サンアンドムーン パートナー・ルナ 二人でボールを蹴りあげてかかと落としとオーバーヘッドを同時に行う。

???

???

???

ルナ

男 風属性 髪の色 薄い黄色 髪型 ソルと同じ

普通体型

ポジション MF

背番号 9

ソルの双子の弟。チームの名前を決めようと言い出した。サッカーが好き。ちなみにチーム名を決めた理由は、特にない。ソルのことを大切に思っている。

必殺技

シュート サンアンドムーン パートナー・ソル 前述に記載

???

???

???

アスタリ

男 髪の色 白銀 髪型 所々突っぱねてる。

普通体型

ポジション MF

背番号 7

吹雪の中遭難してる所をオメガ達に助けられてそのままついてきている。ボールに回転を加えるのが得意で、パスボールを自分のところに戻すこともできる。オメガとは仲がいい。

必殺技

ブロック ヘキサ・レイ 相手の周りに六角形の光を出現させ、爆発を起こしボールを取る。

???

???

???

ボルテクス

男 風属性 髪の色 灰色 髪型 ボサボサ

普通体型

ポジション F W

背番号 15

元々スラム街に住んでいて、オメガに喧嘩を吹っ掛けたところ返り討ちにあう。そのことがきっかけでついてくる。

必殺技

シュート ジ・テンペスト ボールを足ではさんで回転を加え、かかと落として叩き落とす。

???

???

???

パラディン

男 山属性 髪の色 銀 髪型 短め

普通体型

ポジション FW

背番号 16

イギリス出身で銀行強盗に人質にされたところを、オメガに助けられて、その恩を返すためついてきた。紳士に憧れている。

チーム・メンバー 紹介（後書き）

続きはまた次回で。

チーム・メンバー 紹介2

ガイア

男 山属性 髪の色 黄土色 髪型 坊主

普通体型

ポジション D F

背番号 3

ウラヌスとは幼馴染。山の地形などに詳しく地面に触れているときが1番落ち着く。飛行機にはめっぽう弱い。

ウラヌス

男 風属性 髪の色 青 髪型 比較的整ってる。

普通体型

ポジション D F

背番号 4

ガイアとは幼馴染。風の流れを読んで天候を予知することができる。空気が澄んでいる場所が好き。

サーシャ

男 林属性 髪の色 白金 髪型 少しとんがってる。

普通体型

ポジション D F

背番号 2

物を直すことが得意でゴールの修復などを請け負っている。花の香りなどに詳しい。

シリウス

男 風属性 髪の色 白 髪型 ストレート

普通体型

ポジション M F

背番号 6

天体観測が趣味の少年。展望台から落ちそうになったところをオメガに助けられて現在に至る。

必殺技

シュート デルタブラスト 三角形の光線を空中から放つ。 シュ
ートチェイン

???

???

???

ハデス

男 林属性 髪の色 黒 髪型 ボサボサ

普通体型

ポジション F W

背番号 11

戦争が起きた跡地にいた。そこでオメガと出会い、本気の殴りあいの末現在に至る。死体を見るのが嫌で、見ただけで失神する。

シュバルツ

男 林属性 髪の色 黒 髪型 ショート

普通体型

ポジション F W

背番号 13

性格は多少黒い。ハデスと外見がかぶっていることが最近の悩み。
書道が得意。

必殺技

シュート ジェット・ブラック 黒いオーラとともにシュートを放つ。

???

???

???

カルラ

男 山属性 髪の色 茶髪 髪型 ロング

普通体型

ポジション F W

背番号 14

槍の名手の息子で親は死没。ダーツをやらせると100%真中に当たる。

必殺技

シュート トリシューラ ボールを3つに分裂させ、再び一つにする
ことで威力を上げる。

???

???

???

バルキリー

女 風属性 髪の色 薄い水色 髪型 ポニーテール

普通体型

ポジション GK

背番号 18

スウェーデンでオメガ達と出会った。常にトレーニングを欠かさない。

必殺技

キャッチ ヴァルキリア・ランス 巨大な槍を出現させボールを貫く。

???

???

???

バイス

男 火属性 髪の色 灰色 髪型 セミロング

普通体型

ポジション G K

背番号 1 2

チーム・オメガの予備キーパー。守備だけならオメガと並ぶ。オメガがいつもG Kをやっているため出番がない。

イヴァン

男 山属性 髪の色 金髪 髪型 セミショート

普通体型

ポジション FW

背番号10

昔から周りに自分と対等に競える者がおらず、初めて自分と対等に競い合ったオメガと会い、一緒に来た。いつも寝ている。全てにおいて超一流。

必殺技

スキル ハイパーテクニック 自分のテクニックが全て2倍になる。

???

???

???

18話

「編入生のオメガです。よろしくお願いします。」

という感じに俺たちは糸川中学に入った。

自己紹介直後、クラスの女子から黄色い声が多発し男子からは睨まれた。

というわけで放課後。

「俺たち、サッカー部に入部します。」

「そうか。俺は一応キャプテンの洞だ。」

「それで？なんでサッカー部に入部するんだ？」

「フットボールフロンティアを優勝するためです。」

「・・・はっはっはっは！！無理だって！！雷門中がいるんだぞ！？無理に決まってる！！」

「雷門ならこの前倒しましたが？」

「そんな嘘つくなよ！」

「なら、試合してみます？」

「おもしれえ！ひねりつぶしてやるよ！！」

）2時間後）

糸川サッカー部 0 VS 1003 オメガ

「強すぎる…これなら優勝を狙えるんじゃないか？」

「ああ、頼んだぞオメガ！」

「分かりました。」

19話

「ごめんなさい。私好きな人がいるので。」

アイリスは告白してきた糸川中の男子を玉砕していた。

アイリスは糸川中に入った日からずっと男子生徒に告白されていた。ちなみに今振られたのが32人目、チームメンバーを除いた同学年の男子半分だ。

「アイちゃんさっきの1組の湊君じゃないの？女子に結構人気あるよ？」

「え？そうなの？」

アイちゃんとは糸川中にきてから同学年の女子に付けられたニックネームだ。

「もしかして、もう好きな人がいる？」

ピクッ

「えっ・・・マジ？」

「ま、まあ・・・」

頬を掻くアイリス。

「で、一体誰？」

「べ、別に言う必要はないでしょ？」

しらをきるアイリス。だが・・・

「なるほど一緒に編入してきたオメガってやつね？」

「!?!」

アイリスの思考を読み取った系川女子生徒A。

「な、なんで？」

「私に恋愛がらみの隠し事ができると思ってる？こつ見えても『ラブ眼のきい様』と呼ばれているくらい青春してるやつの感情を読み取ることに長けてるからね？」

「全く意味がわからないんだけど・・・」

「で、なんであいつのこと好きなの？名前変なのに。」

「昔助けられたから。それに名前が変なのはちゃんと理由があるんだよ？」

「どんな？」

「それはね・・・」

「数年前」

「ところでいい加減名前決めないの？」

「くどい。名前なんかあってもなくても同じだろ。」

「それじゃ皆！この人の名前を考えよう！！」

「ちよつとまて・・・」

「面白そうだな！そろそろ呼び方を決めておきたかったんだ！」

「それじゃやるか。」

（30分後）

「それじゃあ、候補が出たから選んでね」

「候補つて…」

・オメガ

・名無し

・米

・ラーメン

・ダレイオス4世

・ポケモン

・カイザー

・にんにく

・ケンシロウ

・モハメド

・カレー喰いたい

・レッドリボン

・イエス

・ピアノ

・じゅげむじゅげむこのすりきれかいじやりすいぎよのなんだ
っけ？

「まともなものがねーーーー！！！！！！！！！！」

「さあ、この中から選んでね」

「ピアノって俺は楽器か！！イエスって荷が重すぎるわ！！レッド
リボンってモはや人じゃねえし、カレー喰いたいつて願望じゃねえ
じゃねえか！！モハメドって俺は何人だ！ケンシロウ、俺は殺人拳
は使えん！！カイザーはモはや位じゃねえか！ダレイオスでその一
族に関係ねえ！名無しって変わりねえよ！ポケモンはゲーム名じゃ
ねえか！！寿限無はちゃんと言いきれ！そして長い！！オメガは文
字じゃねえか！！」

「この中から選んでね」じゃないと僕が決めるから」

「ならこれだ！！」

「へー、僕はてっきりケンシロウに行くと思ってたけど。」

「ていうことがあって・・・」

「そ、そう・・・。」

「結局そのままなんだよね。」

「そろそろサッカー部行かなくていいの？」

「あ、そうだった！じゃあね木本さん！」

アイリスはサッカー部のほうへ向かった。

20話

「それじゃあ行くか。」

糸川中のユニフォームを着たオメガ達がフィールドに走っていく。

フットボール・フロンティア地区予選の1回戦だ。

対戦相手は去年全国大会まで進んだアルプス中なのだが、

作者が相手チームのメンバーが全く分からないため、

残念ながら地区予選はダイジェストだけで送らせてもらう。

勝手ながら試合の風景は全国大会からにさせてもらう。

1回戦 アルプス中 0 V S 890 糸川中

2回戦 榊原中 0 V S 860 糸川中

準決勝 紅塔学園 0 V S 900 糸川中

決勝 栖霞間中 試合放棄

という感じで、

「なんと！去年1回戦で姿を消していた糸川中が、チームメンバー

をがらりと変えて超大量得点差で全国大会進出〜!〜!」

・・・雷門の実況と比べると迫力が物足りないのだが、とりあえず
全国大会進出を果たした。

20話（後書き）

ここでアンケートを取りたいと思います。

フットボール・フロンティアが終了したら、そのまま終わらせるか、世界大会に進ませるか、できれば感想の欄に書いていただけると幸いです。

21話

「全国中学サッカーファンの皆様、遂にこの日を迎えました！！今
 此处、激闘の殿堂、フットボールフロンティアスタジアムは、かつ
 てないバトルの予感に、早くも興奮の坩堝と化しております！！フ
 ットボールフロンティア、開幕うう！！」

やはり全国大会ともなると実況が付くのが当たり前のような気がする。

「各地域より激戦を勝ち抜いてきた強豪チームが、今日より日本一の座を懸けて、さらなる激闘に臨みます……！一番強いイレブンは、一体どのチームなのか……？ではご紹介しましょう……！近畿ブロック代表、戦国伊賀島中学……！」

その後も様々な学校が呼ばれて行き、

「続いて東海道ブロック代表、糸川中学！」

「行くぞ皆！！」

[illegible]

「今回初出場の系川中学、地区予選での総得点数はなんと前代未聞の2650点!! さらに無失点を誇るこの系川中学は一体どんな試合を繰り広げてくれるのでしょうか!？」

「そして皆様お待たせしました、昨年度優勝校、関東ブロック代表、

雷門中学！！FFIにて多くの選手を輩出した雷門中学、今年は2連覇を狙います！！」

「やっぱり出てたか、今度は俺たちが勝つからな！！」

「フツ、望むところだ。」

その後、全てのチームの紹介が終わり、

「・・・以上の強豪たちによって、中学サッカー界日本一が決められるのです！！」

こうして開会式は終了した。

22話

「毎年幾多の名勝負を生み出してきたフットボールフロンティア全国大会！このフロンティアスタジアムは、試合開始を今や遅しと待ちかまえているー！！白恋中学対糸川中学！この一戦は、その名勝負の列に名を刻むことになるのかー！？」

・・・というわけで、一回戦の相手は白恋中だ。

「僕は吹雪、よろしくね！」

「俺はオメガだ。よろしく。」

白恋中 フォーメーション

FW

喜多海？

烈斗？

MF

湿原？ 居屋？ 吹雪？ 空野？

DF

白熊？ 押矢？ 目深？ 雪野？

GK

函田？

糸川中^{オメガ}

フォーメーション

FW

ボルテクス？ ハデス？

MF

ソル？

ルナ？

シリウス？
アスタリ？

DF サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファアー？

G
K

オメガ？

試合開始のホイッスルが鳴った。こちらのキックオフで試合が始まる。

「ルナ！」

「ソル！」

「ハデス！」

「ボルテクス！」

「系川中の速攻！ボールは一気にゴール前まで移動した——！！」

「ジ・テンペストV2!!」

函田が地面を叩いた。

「真オーロラカーテン！」

オーロラが現れ、壁となつたが、シュートはそれを突き破つた。

「ゴーーーーール！！先制したのは糸川中ーーーー！！」

「さあ、先制された白恋中のキックオフで試合再開！」

「行くよ！」

「吹雪が凄い勢いで上がっていくー！！！」

「エターナルブリザードV3！！！」

吹雪のシュートが氷を纏った。

「オメガ、吹雪のシュートをがちりキャッチー！！！」

「ガイア！」

ガイアにボールが渡った直後、

「真スノーエンジェル！！！」

「吹雪、再びボールを奪取！」

吹雪は再びシュートを行った。

「ウルフレジェンド（G5）！！！！！」

「少し物真似をさせてもらっ。」

「？」

「ゴッドキャッチ（G3）！！！！！」

「な、なんとお！？オメガが雷門のゴールキーパー円堂の技を使用したぁ！？」

「そんなまさか！？」

「ウラヌス！」

「ここで再び吹雪が迫る！」

「真スノーエンジェル！！」

ウラヌスはかなり上空に飛んだ。

「ウラヌス、遙か上空に飛んで吹雪のディフェンスを避けたー！！」

「高い！」

「ハデス！！」

「ウラヌス、上空から最前線のハデスにロングパス！！」

「デッドキャノン！！」

ハデスがボールを地面に沈ませ、そしてシュートしボールに火が纏われた。

「うおおお！！」

「ゴーーーーール!!! 糸川中追加点!!!」

「ここで試合終了~~~~!!!! なんと74対0で糸川中圧勝!!!」

22話（後書き）

1日投稿遅れました。

23話

「フットボールフロンティア2回戦！前大会準優勝校世宇子中対今大会の台風の目系川中！果たして勝つのはどっちか――！？」

「また会ったね。今度は勝たせてもらうよ！」

「アフロディか。こちらにも負けるつもりはない！」

世宇子中 フォーメーション

FW デメテル？

アフロディ？

MF アルテミス？ アテナ？

ヘルメス？ アキレス？

DF アポロン？ ヘラクレス？

アレス？ デイオ？

GK イカロス？

系川中 フォーメーション

FW カルラ？ ハデス？

MF ソル？ ルナ？

シリウス？ アスタリ？

MF サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファール？

G K

オメガ？

「ゼウスのキックオフで試合開始です！」

「アフロディ！」

「カルラ、ハデス！」

「カルラとハデスが、アフロディに迫る！」

「真へブンスタイム！」

アフロディが指を鳴らすと、周りの時間がゆっくりになった。

その中で、オメガとイヴァンだけがゆっくりにならなかった。

そして再びアフロディが指を鳴らすと、時間が元に戻り、

「「うわあああー！」」

「出たー！！アフロディの高速ドリブルでカルラとハデスが吹き飛ばされたー！！！」

「デメテル！」

「リフレクトバスターV3！！！」

地面が宙に浮かび、シュートが反射された。

「はっ！」

「オメガ、これを片手で防いだー！！！」

「シリウス！」

「デルタプラストV2！！！」

「真裁きの鉄槌！！！」

空から巨大な足が降ってきた。

「津波ウォールV3！！！」

イカロスが地面を叩き、津波が噴出してきた。

その津波を突き破り、ゴールに刺さった。

「ゴーーーーール！！糸川中のシュートが決まったーーーー！！！」

「・・・ここで試合終了――！！76対0で前年度準優勝校、世
宇子中敗北――！！準決勝進出は、糸川中――！！」

24話

「さあ、全国中学サッカーファンの皆様、フットボールフロント
イアもいよいよ佳境！！今日は、Aブロックの準決勝！両チームと
もにここまで無失点の陽花戸中と糸川中の対決です！！」

「・・・お前が陽花戸中のキーパーか。」

「は、はい！立向居勇氣です！よろしくお願いします！！」

「俺はオメガだ。今日の試合、よろしく頼む。」

「はい！」

陽花戸中 フォーメーション

FW 黒田？ 松林？

MF 道端？ 戸田？ 祭利田？

志賀？

DF 玄界？ 石山？

筑紫？ 大濠？

GK 立向居？

糸川中 フォーメーション

FW シュバルツ？ハデス？

M F ソル？

ルナ？

シリウス？ アスタリ？

D F サーシャ？ガイア？ウラヌス？ゼファー？

G K オメガ？

「さあ、糸川中のキックオフで試合開始！」

「ソル！」

「ルナ！」

「ハデス！」

「糸川中の高速パス！ボールが一気に陽花戸中ゴールへ迫る……！」

「シュバルツ！」

「ジェット・ブラック改……！」

「うおおおおお……！」

立向居の背中から魔王が現れた。

「魔王・ザ・ハンド（G3）……！」

「立向居、糸川中のシュートを止めた……！」

「いきますよ！」

「ボールが志賀に渡った！」

「通すか！」

志賀の横に松林が並んでお互いの足にボールを挟んで、

「二人三脚V3!!」

そのまま突っ込んできた。

「そしてボールは松林へ！」

松林はボールを蹴りあげて、空中で回りだした。

「真レインボールプ!!」

シュートが通った後に、花畑が現れた。

「オメガ、松林のシュートを軽々止めた！」

「いくぞ、立向居！」

「!?!」

「なんとお!? オメガとボールが消えたあ!?」

「.....イイイイイイイ

「全員中心から離れるー!!」

イイイイイイイイイイ!!

ヒュッ!!

「うわあああー!!」

「・・・はっ、ゴ、ゴーーーーーール!! オメガの高速シュートが、
ゴールを吹き飛ばしたー!!」

「なんだっただ、今のシュートは...。」

「陽花戸中のキックオフから試合再開!!」

「松ばや・・・」

「オメガがいきなりボールを奪取!？」

「いくぞ!!」

「また消えたー!!」

・・・・イイイイイイイイ

「・・・・来る!!」

イイイイイイイイイイ

ヒュッ!

「魔王・ザ・ハンド（G3）！！！」

「触れただと！？」

「うおおおおお！！・・・うわあああああ！！」

「ゴーーーーール！！キーパー立向居、オメガのシュートに触れるも、止めることができなかったー！！！」

「なんということでしょう！！陽花戸中、見えないシュートで連続して失点！！！」

「これが最後だ！！」

「オメガ、また消えたー！！！！」

「今度は止めてみせる!!」

・・・・・・イイイイイイイイ

イイイイイイイイイイイイ

ヒュッ!!

「うおおおおおおお!! 魔王・ザ・ハンド（G4）!!!!」

「進化したと!?!」

「なんと立向居、見えないシュートをついに止めた――!!」

ピッピッピ――!!

「ここでホイッスル! 20対0で、糸川中決勝進出!! 陽花戸中惜しくも敗れる――!!」

「・・・まさか俺のシュートを止めるやつが現れるなんてな。」

「最後だけですけどね…。でも、次からは完全に止めて見せます!!」

25話

「いよいよフットボールフロンティア全国大会決勝！！雷門中对系川中の試合が始まります！！」

「決着をつけよう、円堂！！」

「望むところだ！オメガ！！」

雷門中 フォーメーション

FW 染岡？ 豪炎寺？

MF シャドウ21鬼道？マックス？虎丸？

DF 栗松？ 影野？ 壁山？ 風丸？

GK 円堂？

系川中 フォーメーション

FW ボルテクス？ ハデス？

MF ソル？ ルナ？

シリウス？ アスタリ？

DF サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファー？

G K

オメガ？

「さあー、試合開始だ！！鬼道が上がっていくー！！」

「アスタリ！」

「ヘキサ・クラッシュV2！！」

「マックス！」

「何！？」

「鬼道、アスタリのディフェンスをかわしたー！！」

「お前の技は、相手がボールを持っていないと発動できない。そう
だろ？」

「くっ！」

「そのまま松野がボールを運ぶ！！」

「うおおおおお！！！！」

ガイアがジャンプして、回転しながら地面にかかと落としを決めた。

「ガイア・ウォール！！」

「うわあああ！！」

「ガイア、松野からボールを奪い取ったー!!」

「ゼファー!!」

「ゴッドブレス改!!」

「ゼファーのロングシュート!!止められるかー!？」

「壁山、頼む!!」

「うおおおお!!ザ・マウンテンV2!!」

「壁山のディフェンス!!止められるかー!？」

「うわああ!!」

その時、ボールの向かう先にシャドウが構えていた。そしてジャンプして回りだし黒い炎を纏った。

「真ダークトルネード!!」

「なんと闇野!壁山との連携でゼファーのシュートをはじき返した!!そのままシュートはゴールへ!」

「タマシイ・ザ・ハンド(G4)!!!!!!」

「オメガ、コトアール代表のロココの技でシャドウのシュートを止めたー!!」

「アスタリ!!」

「いくぞ！」

アスタリがボールを上げて、左斜、右斜、縦に回転を加えた。

「アスタリスク・ドライブ！」

「アスタリの強烈な回転がかかったボールが、雷門ゴールへ襲いかかる——！！！」

「真ダークトルネード——！」

「シャドウまたうちかえすつもりだ——！！！」

「何！？うわああ——！」

「アスタリのシュートが止まらない——！！むしろ威力が上がっている——！！！」

「ザ・マウンテンV2——！うわああ——！」

「ゴッドキャッチ（G3）——！！！」

「円堂止めた——！！！」

「何なんだ、今のシュートは？」

その疑問にアスタリが答えた。

「俺のシュートはあらゆる回転を加えてある。シュートで止めよう

とすれば、その回転を吸収して威力を増す。ただそれだけだ。」

「威力を…吸収するだと？」

「まだ試合は終わってない。さあ、続けよう。」

26話

「さあー、雷門中対糸川中、0対0のまま白熱の試合が続いておりますー!」

「虎丸!」

「はい!」

「サーシャ!」

「おう!」

サーシャが両手を合わせると、雷を発生させ、そして虎丸に向けて放った。

「ジャッジ・サンダー!」

「うわあああ!」

「サーシャ、虎丸からボールを奪取!」

「ソル!ルナ!」

「「はい!」」

「ボールがソルとルナに渡った!」

「「サンアンドムーンV2!」」

「二人の連携シュートが、雷門ゴールに迫る――!!」

「ザ・マウンテンV2!!―ううゎああ―!!」

「ゴッドキャッチ(G3)――!!」

「円堂止めた――!!」

「栗松――!!」

「はいでやんす――!!」

「栗松がドリブルで上がっていく――!!」

「通さない――!!」

「ハデスが立ち塞がる――!!」

「まぼろしドリブル改――!!」

栗松とボールが左右に分裂した。

「栗松ハデスをドリブルで抜いた――!!」

「鬼道さん――!!」

「栗松、鬼道にパス――!!」

「虎丸――!!」

「うおおおおお！！グラディウスアーチ改！！」

その先に、染岡がおり、

「ドラゴンスレイヤーV3！！」

「染岡が虎丸のグラディウスアーチにシュートチェイン！！そして・
・」

「真爆熱スクリュー！！」

「豪炎寺も加わり強烈なシュートチェインだー！！」

「うおおおおお！！タマシィ・ザ・ハンド（G4）！！！！」

「オメガも必殺技で迎え撃つー！！」

「うおおおおおおおおああああ！！！！」

「ゴーーーーー！！ル！！糸川中キーパーオメガ、ついに無失点記録敗れるーーーー！！」

「やったな！！虎丸、染岡、豪炎寺！！」

「はい！！」

「ああ。」

「やってやったぜ！！」

「いや、まだ安心はできない。」

「鬼道？」

「まだあいつのシュートが出ていない。」

「オメガ・ブーストか…。」

「糸川中ここで選手交代のようです。15番、ボルテクスに変わって10番イヴァン。そして11番ハデスに変わって・・・おおとくくくくく！？」

「！！！？」

「な、なんとキーパーのオメガがFWに上がってきたくくく！そしてキーパーには今大会初出場のバイスが入りますくくく！」

「やっと出番だくくくく！！」

「キーパーは任せたぞ、バイス！」

「あいよ！キャプテン！！」

「さあー、糸川中のキックオフで、試合が再開しますくくく！」

「イヴァン！」

「オメガ！」

「イヴァンとオメガの高速パス！速過ぎてボールが消えた～～！！」
「？」

「何！？」

「二人の高速ドリブルで、雷門イレブンが抜かれていく～～！！なんてスピードだ～～！！」

「オメガ！！」

「ここでオメガが消えた～～！！」

「……イイイイイイイイイイイ

「くる！！」

「イイイイイイイイイイ！！」

「ヒュン！！」

「ゴッドキャッチ（G3）！！！！」

「円堂、触れたー！！」

「イヴァン！！」

「なんとここでイヴァンオメガのシュートにシュートを加えた～～」
「！！！！」

「何！？うわあああ！！」

「ゴーーーーー！ル！！糸川中、同点に追いついた~~~~！！
ここで前半終了のホイッスル！！対１で後半に勝負を預けます！！」

26話（後書き）

31話になったら更新スピードを落とそうと思います。

27話

「フットボールフロンティア全国大会決勝戦、後半戦が始まります
 ！！果たして、優勝の栄冠を手に入れるのは、雷門中か、それとも、
 糸川中か！？」

「勝つのは俺達だ。いくぞ!!!」

「俺たちだって負けない！！いくぞ皆！！」

「おっ！」

「糸川中のキックオフで、試合再開！」

「イヴァン！！」

「オメガ！」

「再び高速ドリブル……雷門止めることができない……！」

その時、鬼道がオメガとイヴァンの間を通り抜けた。その足には、

「なっ！？」

「なんと鬼道、あの高速パスを止めた〜！〜！」

「豪炎寺！！虎丸！！」

「鬼道、ロングパス！！」

「行くぞ虎丸!!」

「はい!豪炎寺さん!!」

「おおつとこれは……!!?」

「タイガー……」

「ストームV2!!」

「でたー!!豪炎寺と虎丸の連携必殺技、タイガーストーム!!雷門、リードできるか……!!?」

「ここは通さない!!」

バイスが両腕を思い切り広げると、ボールの向かう先に巨大な3つの万力が現れた。

「トリニティ・バイス!!」

バイスが腕を振ると、3つの万力がボールを押し潰した。

「糸川キーパーバイス、タイガーストームを粉碎……!!」

「何!?!」

「そんな!?!」

「ウラヌス!!」

「バイス遙か上空に投げた！！これはパスミスか？」

その時、ウラヌスがジャンプした。

「なんとウラヌス、あの高さのボールをとったーーーー！！なんてジャンプ力だーーーー！！」

「オメガ！！」

「ウラヌス、空中からオメガへの超ロングパス！！」

「いくぞ！！」

「オメガ、ボールを受け取ったと同時に消えたーーーー！！」

・・・イイイイイイイイイイイイ

イイイイイイイイイイイイイイ

ヒュン！！

「ザ・マウンテンV2！！うわあああ！！」

「ゴッドキャッチ（G3）！！！！」

「円堂止めることができるか~~~~！！！！？」

「止めません！！！！」

「ここでイヴァンも加わったー！！円堂、万事休すか……！！？」

「うおおおおおー！！」

「キャプテンー！！」

「オレもまだやれるっすー！！」

「壁山と栗松が円堂のサポートに入っただー！！」

「「「うおおおおおー！！」「」「」

「うわああー！！」

「と、止めたー！！！！」

「シャドウー！！」

「鬼道ー！！」

「豪炎寺、虎丸ー！！」

「これは再びタイガーストームか！？」

「染岡ー！！」

「違うー！！染岡にダイレクトパスだー！！！！」

「轟けー！！ドラゴンスレイヤーV3ー！！」

「豪炎寺!!」

「真爆熱スクリュー!!」

「トリニティ・バイス!!」

「染岡と豪炎寺のシュートチェイン!! バイスを崩せるか――!!」
「!?!」

27話（後書き）

前回、31話で更新速度を落とすと言いましたが、正確には31部です。すいません。

28話

「・・・止めたーーーー！！バイス、染岡と豪炎寺のシュートを止めたーーーー！！」

「くそっ！！」

「シリウス！！」

「イヴァン！！」

「ボールはイヴァンへ渡った！！」

「そろそろ俺も技を使わせてもらっぞ。」

「させるかっ！！」

「風丸がスライディング！！止められるかー！？」

次の瞬間、イヴァンの周りに雷撃が発生した。

「イヴァン・ボルト！！」

「うわあああ！！」

「風丸が弾き飛ばされた！なんという技だーーーー！！」

「行くぞ円堂守！！」

イヴァンがボールを軽く蹴り上げると、横に回り雷の剣を右脚に纏わせながら蹴りを入れた。

「ボルト・カイザー!!」

「イヴァンの必殺シュート!! 円堂止めることができるか――!!」
「？」

「ザ・マウンテンV2!! うわああああ!!」

その後、栗松が水色に光った足を横に回した。

「スピニングカット!!」

足を回したのと同じように地面から水色の衝撃波がでてきた。

「ゴッドキャッチ(G3)!! うわああああ!!」

「ゴ――ル!! 追加点は糸川中――!!」

「皆諦めるな――!! まだまだいけるぞ――!!」

「雷門のキックオフで、試合再開!!」

「まだ試合は終わってない!! いくぞ皆!!」

「シャドウ!!」

「ヘキサ・クラッシュV2!!」

「鬼道!!」

「くっ!!」

「虎丸!!」

「はっ!! グラディウスアーチ改!!」

「ドラゴンスレイヤーV3!!」

その先に豪炎寺がいた。

「爆熱スクリューなら効かないぞ!!」

「うおおおおお!!」

豪炎寺が様々な方向に回転し、炎の剣を出した。

「なっ!?!」

「マキシマムファイアー!!」

「くっ!! トリニティ・バイス!!」

「虎丸のグラディウスアーチに、染岡のドラゴンスレイヤーと豪炎寺のマキシマムファイアが加わり、今までにない威力になった!! バイス、止めることができるか!!」

「うつつおおお!!...うわあああ!!」

「ゴーーーーーール！！雷門同点！！勝負はわからなくなってきたぞーーーー！？」

「さすがだな。だがまだ時間はある。決着を着けよう！！」

「糸川中のボールで試合再開！！間もなく後半も終了！！勝負は口スタイムにうつるのか！？」

「勝負はここで決める！！」

「オメガ、再び消えた！！」

「止めてみせる！！」

「俺がさせない！！」

イヴァンが何もない所に、

「ボルト・カイザー！！」

シュートをした。その時、なにかに当たる音がした。

イイイイイイイイ！！

「音が大きい・・・まさか！！」

キイイイイイ！！

「ゴッドキャッチ（G3）！！！！」

円堂はボールに触れた。しかし、

「威力が上がってる!?!」

「イヴァンは俺のシュートを見ることができる。だから唯一タイミングを見計らってシュートを加えることができるのだ。」

「くっ……うおおおおおおお!!」

「円堂、止めることができるか——!?!」

28話（後書き）

次回、決勝戦最後です。

29話

「オメガのシュートに、イヴァンがシュートチェイン……凄まじい威力だー！！円堂、止めることができるか……！！？」

「キャプテン……！」

「円堂……！」

「円堂……！」

「キャプテン……！」

「円堂……！」

「うおおおおおおお……！」

その時、円堂のゴッドキャッチが進化した。

「何……？」

「と、止めた……！！円堂、間一髪でゴールを死守……！！！」

「マックス……！」

「ジャッジ・サンダー……！」

「うわああ……！」

「サーシャ、マックスからボールをとったー!!」

「うおおおお!!」

「うわあ!!」

「それを虎丸がスライディング!!」

「ガイア・ウォール!!」

「くっ!!」

「それをガイアが止める!!一進一退の攻防が続く!!」

「イヴァン!!」

「ボルト・カイザー!!」

「ゴッドキャッチ(G4)!!」

「円堂再びキャッチ!!」

「シャドウ!!」

「ヘキサ・クラッシュV2!!」

「鬼道!!」

「くっ!!」

「鬼道————!!」

「円堂が上がってきた——!!」

「虎丸!!豪炎寺!!」

円堂と虎丸と豪炎寺がボールを中心にポーズを取り、ボールの周りを回り始めた。

「「「ジェットストリーム（G2）!!」」」

「トリニティ・バイス改!!」

「円堂、虎丸、豪炎寺のシュートに、バイスの技が進化して応える——!勝つのはどっちだ——!!?」

「負けてたまるか——!!」

「「「いっけ————!!」」」

「ううううおおおおおおおおああああああああ——!!」

「ゴ——————ル————!!雷門逆転!!——ここで試合終了のホイッスル!!雷門中、2連覇達成!!」

「やった——!!」

うおおおおおおおおお!!

スタジオ中から歓声が鳴り響いた。

「……負けたのか。俺達は……」

「オメガ……」

7
 •
 •
 •
 ○
 8

オメガが円堂のほうに近づいていった。

「……優勝おめでとう。いい試合ができたこと、感謝する。」

「オメガ……ああ！！……すげー楽しかった！！……またサッカーやろうぜ！」

「ああ！！だが次は俺達が勝つ。首を洗って待てる…。」

「またなー！！」

29話（後書き）

フットボールフロンティア編、これにて終了です。

次回からは、世界大会編です。これからもよろしくお願いします！
！！

30話

フットボールフロンティア全国大会決勝で雷門中に敗北した後、俺達は系川中で普通の生活を行っていた。

そんなとある日、ゼファアの持っている携帯が鳴った。

「誰からだ？ゼファア。」

「ああ、ギリシャにいた時の友達だ。ちょっと待ってろ。」

そう言つてゼファアは電話に出た。

「ああもしもし？……えっ、マジか？……そうか、ありがとな！！……1週間後？たぶん大丈夫だろ……それじゃあな！！」

「何を話してたんだ？」

「いやあさ？俺達、FFIのギリシャ代表の候補に挙がったらしくて、その選考試合が1週間後にあるってさ。」

「ギリシャ代表か……」

「きっと日本代表に円堂達が来ると思うぞ？」

「そうか、再びあいつらと戦える舞台に立てるといわけか……。面白い！ギリシャ代表になって、円堂達にリベンジするぞー！」

「……………おおー！！……………」

「「「「「「」

「出発は明後日だ。皆準備しとけ！！」

こうして俺達は、ギリシャに向かうことになった。

31話

くギリシャ・空港く

「久しぶりだなー！！ギリシャー！！」

「おーい、ゼファーー！！」

空港を出たところで、ゼファーを呼ぶ声がした。

「おー！アレキー！！・・・それで、そいつら誰だ？」

アレキと呼ばれた少年は、なぜかガラの悪そうな奴らに囲まれていた。

「いやー、それがさー……」

く15分前く

「もうそろそろかな？」

ドンー！！

「いつてえー！！！！テメエどこ見てやがる？」

「慰謝料払えよー！！」

「……ってわけで、こうなってるんだよ。」

「なんだデメエ？やんのかコラア？」

「やってやるよ。ただしサッカーバトルでな。」

「へっ！いいだろう！！お前らが負けた場合は慰謝料10万もらうからな！！」

「その程度でいいならやってやる。」

ガラ悪い奴ら　フォーメーション

ガラ悪A　ガラ悪B　ガラ悪C

ガラ悪D

オメガ　フォーメーション

カルラ

ソル　　ルナ

オメガ

「それでは……」

ピーッ!!

「いくぞオラァ!!」

〈3秒後〉

「っ、っええ……」

「この程度か……」

「君がオメガ? やっぱり聞いていた通り強いね。」

「お前がゼファアの親友か。」

「そう、そしてこのチームの監督をやらせてもらいます!!」

「……は?」

「FFIに参加するには監督がいないとだめだからね。だから僕が監督になるってわけ!!」

「……そうか、それはありがたい。」

「それじゃさっそくレッツゴー!!」

「……それ、英語だろ。」

31話（後書き）

今頃になって思ったんですが、円堂が3年になって綱波が高校1年になったわけだからイナズマジャパンのメンバーに一人空きができるので、感想欄に入れてほしい選手の名前をお願いします。

32話（前書き）

前話の最後にイナズマジャパンの綱波の抜けた枠を募集し始めたので、感想欄にお願いします！！

32話

「そういうことで、ギリシャの代表は君たちにやってもらおうよ。いいかな？」

「ああ。」

……まあ、そういうわけで選考試合も圧勝し、俺達はギリシャ代表となった。

ちなみにスコアは200対0で圧勝。

というわけで、ギリシャに着いてから数日後…

俺とゼファーとイヴァン以外は、普通に練習中。

俺達の練習方法は、とにかく人にぶつからず、止まらず、スピードを落とさないという、要するに体力とスピードと身のこなしを鍛えること。

何故この3人だけかと言うと、残りのメンバーはミコノス島30周目で倒れたため。

現在はこの3人で67周目、俺とイヴァンは依然として変わった様子は無いが、ゼファーに少し疲れの色が見え始めている。

「大丈夫か？ゼファー。」

「話しかけんな！！お前らは平気なのか！？」

「「ああ、まだ全然。」」

「化物か!？」

そして100周目、とりあえず限がいいのでこれで終了。

俺とイヴァンは平然としているが、ゼファーはすでに汗だくだった。

「……。」

「結構粘ったね、ゼファー。」

「よし、次は1000周目までやるか。」

「……。」↑疲れ過ぎて声も出ない。

「……それよりゼファーを休ませたほうがいいんじゃないか？」

「……そうだな。」

合宿所に戻り、ゼファーを寝かせた後、俺達は他の皆の練習に加わった。

「イヴァン!」

「ボルト・カイザーV2!!」

「真トリニティ・バイス!!!」

「ナイスキャッチ、バイス。」

「ありがとな!!」

「……。」

オメガはバイスを見て沈黙していた。

「キャプテン、どうした？」

「……バイス、お前は新しいキーパー技を覚えろ。」

「新しい……技？」

「ああ。」

「なんでだよ？いつもキャプテンがキーパーやってるから俺の技は出る機会は少ないだろ？」

「いや、イナズマジャパンにはすぐにお前のトリニティ・バイスは破られるだろう。それに俺のもオリジナルの技じゃなくコピーだ。いつまでもコピーが通用するほど、世界は甘くない。」

「それがどうしたんだよ？」

「だから、俺はお前にキーパーを全て任せる。」

「……マジで？」

「ああ、そうすれば今までより攻撃の幅が広がるだろ。そしてお前

が新しいキーパー技を覚えれば、イナズマジャパンにもきつと勝てる。」

「キャプテン……分かった。新しい技を身につける、そしてイナズマジャパンに勝つんだ!!」

「その意気だ、頼んだぞ。」

「あいよ!!」

33話（前書き）

お久しぶりです。

ダンボール戦機のラスボスに、30分ぐらい舐めっこを繰り返して漸く勝てました。

33話

今日もオメガとイヴァンとゼファーはランニング中。

僕達もようやく50周まで付いていけるようになったけど、あの3人の体力はどうなってるんだろうね？

「それじゃいくよ〜〜!!」

「こい!!」

「サンアンドムーンV2!!」

「うおおおおお!!」

バイスが両手を様々な向きで合わせる。

すると、つつすらと巨大な壁が現れてソルとルナのシュートを止めた。

「・・・ねえ、どうして未完成の技で僕らのシュートを止められるわけ？」

文句を言う双子。

「未完成でこの威力なら、完成したらすごい威力になるだろうな。」
話をそらすバイス。

「話それてるよ?」「」

「ああ悪い悪い。」

「もう一度、いくよー!ー!」

「2時間後」

「今日の練習はここまでだ。ちゃんと休めよ。」

全員と合流するオメガ。

「.....」

・・・と、息切れしているゼファー！。

「今日は何周までいったの?」

「500周。」

「それは・・・あなるわね。」

「ところで、バイスはどうか?」

「あつちで倒れてるよ。」

「技は？」

「まだ未完成。それでも威力は十分。」

「そうか。」

バイスに寄るオメガ。

「・・・大丈夫か？」

「・・・大丈夫だ、心配するな...。」

「そうか。」

バイスを背負ってその日は合宿所に戻った。

33話（後書き）

イナズマジャパンの選手の方のアンケートはまだ募集しております。

感想欄をお願いします。

34話

「さあ、FFIヨーロッパ予選、ローズグリフォン対ジ・オメガ
！！これは一方的な試合が続いております！！」

「まだ諦めるな！！チャンスは必ずやってくる！！」

「エッフェルドライブV3！！」

高く打ち上げたボールの後ろにエッフェル塔が出現し、回転を増してゴールに向かってきた。

「うおおおお！！」

バイスは新たな技の特訓をやりながら試合をしていた。

それでも未だ無失点を誇る。

「試合終了のホイッスル！！25対0でギリシャ代表ジ・オメガ勝利！！FFI本選進出を早くも決めました！！」

イタリアもイギリスも力をつけてきてるな。流石に今まで通りには
いかないか。

「それでは本選出場を記念して、かんぱ〜〜〜〜い!!」

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・・なんか言ってくれーーーー!!」

「いや、なんかと言われてもな……。」

「「突っ込みづらいし……。」」

「第一な、お前はそれでボケてるつもりなのか？」

そんな感じで皆が騒いでいる頃、

「本選出場おめでとう。」

「ああ。」

アイリスとオメガは二人で空を眺めていた。

「あのさ、オメガ？」

「なんだ？」

「もし世界大会に優勝したら、言いたいことがあるんだ。」

「？本選に出るのは俺達だぞ？」

「あはは、そうだね。」

「まあいいか、その時はちゃんと聞いてやる。そのためには円堂達のいるイナズマジャパンを倒さないと。」

「うん！」

その時、ある男が近づいてきた。

「アイリス。」

「！」

「この声は……」

そこにはアイリスの父親がいた。

「お父様、何故ここに？」

「おまえを連れ戻しに来たに決まっているだろう。早く屋敷に戻る準備をしなさい。」

「いや!!」

「言うことを聞きなさい。お前はセルディック家の娘として、家を継ぐのだ!!」

「絶対嫌!!」

「アイリスのお父さん。」

「貴様か。アイリスは連れていく。アイリスは許嫁と結婚して、セルディックの名を継ぐ義務がある。」

「私にそんなのを継ぐ義務なんかない!!」

「お前は黙つとけ!!」

「あんたが黙つてろ!!」

「!!」

「!!」

オメガが初めて怒鳴った。

「アイリスはあんたの所有物じゃない！アイリスには自由に生きていく権利がある！！それをあんたが邪魔する権利は、ない！！！！」

「部外者の貴様が口を出すな！！」

「いや！出させてもらう！！あんたのような自分の娘の人生を決めつけようとする奴を、俺は絶対許さない！！」

「黙れえ！！」

その時、イヴァンがこっちにやってきた。

「オメガ、さつきから何怒鳴ってるんだ？」

「イヴァン！！」

「イヴァン…まさか！！」

アイリスの父親が何か驚いた。

「あなたはまさか、イヴァン・G・グロウレイヴ様！？」

「ん？そうだけど？」

「何故王族がここに？」

「こいつらと一緒にいる方が面白そうだからさー、ちなみに父さん達にはちゃんと話は付けてるから大丈夫。」

「これは失礼しました!!」

「いって、ところでさっき怒鳴ってたのはなんでだ？」

「こいつがアイリスを無理やり連れて帰ろうとしたからだ。」

「ふーん。なら条件を着けよう。」

「条件？」

「もし俺達がFFI世界大会で1敗でもしたらアイリスを連れて帰るといい。だけど俺達が優勝したらアイリスを自由にしてやれ。あんたは俺達の試合を全て見ておくこと。いいな？」

「・・・仕方ない、王族がそこまで言うのなら・・・だがその前にこちらが用意したチームと戦ってもらう。アイリスの許嫁のチームだ。それでお前達が負けたらその時点でアイリスは連れて帰らせてもらう。」

「いいよ。」

「おいイヴァン!!」

「安心しろオメガ。お前は勝つ自信がないのか？」

「・・・いや、こんな奴のチームになんか絶対に負けない!!」

「よし、決まりだな。」

「では試合日程はこちらで決めさせてもらう。試合は明後日の午後3時、お前たちのグラウンドで試合を行う。いいな？」

「ああ、俺達は負けない!!」

35話

（翌日）

「君か、僕のフィアンセを連れ去ったという不届き者は。」

「不届き者が…」

「私はあなたと結婚するつもりはありません！」

「おお愛しのマイハニー…このアントニオ・エインズワース、この試合に勝利して必ず君を取り戻すからね」

「やめてください、気持ち悪いです…！」

ウザさ全開のアントニオと、気持ち悪がっているアイリス。

「とりあえずこの試合は昨日俺が言った通りにアイリスの自由がかかってる。絶対に勝つぞ…！」

「「ねえ、オメガ…！」」

「なんだ？」

「「あっちのチームって、現役のプロを呼んでない？」」

「確かに…レオナルドにギャレットにジークにジャック、ジョニーまでいるぞ…？」

F W

イヴァン？

オメガ？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？ アスタリ？

D F サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファー？

G K

バイス？

「皆、今日は全員技を使っている。」

「え？いいのか？」

「今日はアイリスの命運がかかっている。大切な仲間の未来を守るためだ。」

「・・・分かった！！」

試合開始のホイッスルが鳴った。

「ギャレット！」

ギャレットにボールが渡った時、オメガが飛び出した。

「ボルケイノカットV3！！」

「うおー！！」

「ソル、ルナ!!」

「サンアンドムーンV2!!」

「ザ・キャッスル!!」

ジャックが両手を合わせると城壁が現れ、シュートにぶつかった。

「なに!?!」

「ケビン!」

「ロベルト!」

「僕に渡せ!!」

「・・・。」

ロベルトは嫌そうにアントニオに渡す。

「不屈き者に天誅を!!」

アントニオはボールを高く蹴り上げて、空中で二度蹴った。

「エアロツヴァイ!!」

「はああ・・・」

バイスが様々な向きで手を揃える。

「うおおおお!!」

ゴールを囲う様に巨大すぎる楯が現れ、シュートをはじいた。

「やった・・・完成だ!!」

「やったな、バイス!!」

「行け、ソル!!」

「止めてやる!!」

「そうはいくか!!」

ソルに巨大な炎の翼が生え、炎の球体に包まれた。

「ヴァルゾダース!!」

ソルはそのまま突進した。

「イヴァン!!」

「ボルトカイザーV3!!」

「うおおおお!!」

「oooooooo!!」

再びチームアントニオのキックオフ。

「僕が負けるか！！エアロツヴァイ！！」

「ザ・イージス！！」

バイスの新技によりチームアントニオのシュートは1本も決まらず、40対0という結果で終わった。

「そんな！？プロを集めたんだぞ！？なぜ勝てない！？」

「お前のチームは、お前がチームの士気を乱しているせいで本来の力を出し切れていない。」

「そんな・・・」

「そんなことより良かったな、バイス！！新しい技が完成して！」

「ああ、これからも強くしていくさ！！」

35話（後書き）

ヴァルゾダースはダンボール戦機のラスボスの技を真似ました。

31話のアンケートについて

31話のあとがきで始めさせていただいたイナズマジャパンの空き枠に入れる選手のアンケートを行わせていただいたのですが、現在までで一票しか入っておりません。

出来れば感想とともに書いていただけると幸いです。

選手の条件としては以下の通りです。

- ・男子選手のみ
- ・他国のチームに所属している選手（アフロディ・バーン・ガゼル・一之瀬・土門）以外の選手
- ・出来る限り強い選手

以上の条件を満たす選手を感想とともに書き込むようお願いします。

期限などは決めておりませんので投票お願いいたします。

以上、『イナズマイレブン Ω』の作者、sasamiからの要望でした。

勝手なことを申して申し訳ございません。

36話（前書き）

更新遅れました。

36話

「ギリシャ・空港」

「止せ！俺はあれに乗りたくない！！！」

「駄目だよガイア。あれに乗らないとライオコット島に行けないじゃないか。」

「とととととにかく止せ！！俺は飛行機が嫌なんだ！！！」

「…オメガ。」

「ああ。」

オメガはガイアの後ろに回り込んだ。

「・・・悪い。」

オメガはそう言って、ガイアの首の後ろを叩いた。そしてガイアは気を失った。

「さっさと乗せていこう。」

そうしてオメガ達はライオコット島行の飛行機に乗った。

「・・・はっ!？」

ガイアが目を覚ましたのは、飛行機の中だった。

「・・・うづ。」

ガイアは強烈な吐き気に襲われ、気絶した。

「あいつはどうにかならないのか？」

オメガがウラヌスに聞いた。

「昔からどうにかしようと思ってたんだけどね、結局どうにもならなかったんだよ…」

ウラヌスは残念そうに答えた。

「そうなのか…」

「ところでオメガ？」

アイリスがふいに質問する。

「なんだ？」

「どうして私と席が隣なの？」

「?それがどうした？」

オメガの座席とアイリスの座席は隣だった。

「いや・・・、その・・・」

顔を少し赤らめるアイリス。

「まあこの座席は適当に決めたから、たまたまこうなったのかもな。」

「…馬鹿。」

「？」

「やっぱり空はいいなあ・・・。」

ウラヌスがつぶやいた。

「最近私出番少ない？」

バルキリーもつぶやいた。

「俺もないな。」

「俺もだ。」

カルラとパラディンもつぶやいた。

「~~~~~」

イヴァンは音楽を聴いていた。

「zzz・・・」

ソルとルナは寝ている。

残りのメンバーも、まあ、色々やっていたわけだが、

「・・・お・・・おろし・・・て・・・くれ・・・」

ガイアは苦しそだった。

「まもなく、ライオコット島に到着します。」

37話

「ついたな、ライオコット島。」

オメガ達はライオコット島に到着した。

「ウラヌス、ガイアの様子は？」

「全然駄目、完全にのびてる。」

ウラヌスはガイアの肩をもっていた。ガイアは顔色を悪くしていた。

「……………うつぷ……………」

「他は大丈夫か？」

「ごめん、一応監督の人がはしゃぎ過ぎて頭打った。」

一応監督のアレキはライオコット島に来たことにはしゃいで頭を打ったらしい。

今はカルラに担がれている。

「あいつはしゃぐとへまするからな……………」

「……………それは大体分かってきた。」

「他は大丈夫だな。行くぞ。」

オメガ達はバスに乗り、合宿所に向かった。

「合宿所に着いて早速だが、練習するか。」

「今日ぐらいは休もうよ……………」

「……………さんせ……………い。」

「……………分かった、今日は休みだ。」

「さすがに長いな。」

「ギリシャにいた時よりな。」

オメガとイヴァンはライオコット島の外周を走っていた。

「あと100周したら終わりにするか。」

「オメガ。」

「なんだ？」

「このランニングが終わったら、俺の新しいシュートを見てくれな
いか？」

「新しい技ができたのか！」

「ああ。」

「よし、そうなれば早く終わらせるぞ！」

「ああ！」

ライオコット島周囲のランニングを終えた後、オメガはイヴァンの新しいシュートを見ることにした。

「……………行くぞ！！！」

「来い！！！」

イヴァンはボールを空高く蹴りあげ、ジャンプし、右脚から光る剣を出して、ボールの同じ所を連続且つ高速で蹴った。

「クラウ・ソラス!!」

そのシュートが放たれた瞬間にオメガは必殺技を出した。

「ゴッドキャッチ（G4）!!!!!!」

イヴァンのシュートはオメガを弾き飛ばし、ゴールのネットを破った。

「………凄い威力だ…。右腕に少し罅が入った…。」

「悪い…。」

「気にするな。この程度の怪我、すぐに治る。」

「でも試合は…。」

「お前たちだけでも十分戦える。」

「………。」

「俺は暫く病院に通う。チームのことは任せたぞ。」

「………分かった………。」

38話

「今年もやって参りました！第2回フットボールフロンティア・インターナショナル！！予選を勝ち抜いた強豪10チームが、このライオコット島で激突します！！実況は私、マクスター・ランド。解説は元ヨーロッパリーグMVPストライカー、レビン・マードッグさんでお送りします。」

「よろしく。」

「それでは選手入場です！最初に入場してきたのは、ブラジル代表チーム、ザ・キングダム！！先頭に立つのは、マック・ロニージョです！」

「昨年は準決勝でイナズマジャパンとの激闘を繰り広げ、惜しくも敗北を喫してしまいました。今年はどんな戦いを繰り広げてくれるのでしょうか。」

「続いての入場は、イタリア代表チーム、オルフェウス！！戦闘はイタリアの白い流星、フィディオ・アルデナです！」

「こちらも昨年、準決勝でリトルギガントに敗北を喫しましたが、今年はリベンジを誓います！」

「そろそろ俺達の番か……」

ゼファーが時間を気にする。

「オメガ、開会式に参加できなかったな……」

アスタリスクが心配する。

「悪い、俺が新必殺技の練習につき合わせたから……」

反省するイヴァン。

「そこまで心配する必要はないだろ。あいつは絶対に戻ってくる。それまでは絶対に負けない。」

ハデスが答える。

「アイリスのこともあるしね。」

「…………ごめんね。私のせいで…………。」

「そんなこと気にすることないって！それに全部勝つので面白そうだし！！」

「よし、行って来い、お前ら!!」

[illegible]

「ギリシャ代表、ジ・オメガ！！先頭に立っているのは、ヨーロッパが生み出した天才、イヴァン・G・グロウレイヴ！！」

「予選を全て無失点勝つ大量得点で勝利した今大会注目のチームですが、キャプテンのオメガは練習中の負傷により開会式を控えております。」

「続いては昨年度フットボールフロンティア・インターナショナル優勝した日本代表、イナズマジャパンの入場です！！」

「今年は2連覇を狙うイナズマジャパン、一体どんな試合を見せてくれるのでしょうか？」

「オメガはいないのか？」

「ああ、俺のシュートに受けさせて、怪我をさせてしまった。」

「そうなのか。」

「お前達と試合する時までには、戻ってくると思う。あまり心配してやるな。」

「…分かった！」

「さあ、いよいよこの強豪10チームが激突します!!世界の頂点に立つのは、どのチームなのか!？」

その頃、ライオコット島・病院……

「先生、何日ぐらいで試合に復帰できますか？」

「軽く見積もって2週間というところだろうか。しかし医者観点から言わせてもらう。君はもう試合をしない方がいい。」

「！？どうしてですか？」

「通常人間の脳には、力を抑えるためのリミッターみたいなものがあってね、君の脳にはそれが無い。今までどうして体がもっていたのかは気になるけど、とにかくこのまま試合を続けると、何れ君は死ぬよ？」

「……………構いません。俺はあいつらの為に生きてるんです。あいつ

「らの為に生きることが、俺の存在意義なんです。」

「……………そうか。それじゃ頑張りたまえ。」

「失礼します。」

39話（前書き）

更新遅れました。

もうすぐ夏休みなので多分ペースを上げられると思います。

39話

「……………初戦は今日か。」

オメガはライオコット島の病院で呟いていた。

予選グループAとグループBは以下の通りである。

グループA

・日本代表 イナズマジャパン

・ブラジル代表 ザ・キングダム

・スペイン代表 レッドマタドール

・イタリア代表 オルフェウス

・アルゼンチン代表 ジ・エンパイア

グループB

・コトアール代表 リトルギガント

・イギリス代表 ナイツオブクイーン

・アメリカ代表 ユニコーン

・ギリシャ代表 ジ・オメガ

・ドイツ代表　ブロッケンボーグ

「今日はブロッケンボーグとの試合か。大丈夫だろうな。」

「全世界のサッカーファンの皆様、お待たせしました！！本日はフットボールフロンティア・インターナショナルグループB、ブロッケンボーグ対ジ・オメガの試合をここ、ヤマネコスタジアムからお送り致します！実況はわたくしマクスター・ランド、解説は元ヨー

ロッププロサッカーリーグMVP、レビン・マードックさんです！」

「よろしく！」

審判の後に両チーム選手が入場した。

「よく考えてみたら、オメガが試合出ないのってこれが初めてだな？」

「そう言えばそうだな。」

ガイアとウラヌスが談笑していた。

「……………」

そんな中、マネージャーとして同伴したアイリスは気を落としていた。

「どうした、アイリス？」

「ちょっとオメガのことが気になって……………」

「そーかー、アイリスはオメガのことが好きだからなー。」

「………どうしてそのことを！？」

「普通に態度を見てると分かるよ。」

「……………」

顔を赤くして黙りこむアイリスと、おちよくってたゼファー。

「暗い顔してると、振り向いてくれないかもよ？」

「暗い顔なんかしてないもん！！」

「はっはっは！！そりゃ失礼！まあ、試合終わったらあいつに笑顔で報告してやれ。勝ったってさ。」

「……………分かった！！」

主審がコイントスを行った。

「さあ、ピッチサイドではコイントスが行われています。」

コイントスの結果は、表だった。

「ギリシャのボールでキックオフです。」

コイントスが終わった後、ブロッケンボーグのキャプテン、ヨナス・ポラックが握手をしてきた。

「今日の試合はよろしく頼む。」

「うちらこそ。」

イヴァンは握手に応じた。

ジ・オメガ フォーメーション

F W イヴァン? ハデス?

M F ソル? ルナ?

シリウス? アスタリ?

D F サーシャ? ガイア? ウラヌス? ゼファア?

G K バイス?

ブロッケンボーグ フォーメーション

F W マキシム? ペーター?

M F テオ? ヤン? ニクラス? ヨナス?

D F アレク? ハイナリヒ? クルト? ルーカ?

G K トルスデン?

「さあ、両チームの選手がキックオフを待っています！マードックさんから見て、この試合、どう予想されますか？」

「ブロッケンボーグはヨーロッパでも指折りの実力のあるチームですが、ジ・オメガはキャプテンが欠けているとはいえその実力は未知数とされています。」

試合開始のホイッスルが鳴った。

「さあ、試合開始です！」

「行くぞ！」

ハデスがボールを少し蹴り上げ、足でボールの周りに円を描き、ボールは黒い波動に包みこまれた。

「デスブラスト！！」

その黒い波動はハデスに蹴られた後ゴールに向かって飛んでいった。

「ハデスの強烈なシュートが、ブロッケンボーグのゴールを襲う――！！」

トルステンは腕を上下左右様々な向きに振り最後に両手を合わせて開いた。

「真シュートラップ！！」

開いた瞬間に赤外線トラップの様な物がゴールの前に張り巡らされ

た。

その内の1本がボールに触れたが、次の瞬間にはボールはゴールの中に入っていた。

「ゴーーーーール!!!!ジ・オメガ、先制!」

「開始30秒で先制点とは、実力が測り知れませんね。」

「さあ、ブロッケンボーグのキックオフで試合再開です!!」

40話

「キックオフ早々、ヤンがジ・オメガ陣内に突っ込むー!!」

「通らせるか!」

シリウスがヤンの前に立ちふさがる。

「UボードV3!!」

ヤンは突然地面に潜った。

「何処に行った!？」

その時、シリウスの後ろからヤンは現れた。

「ペーター!」

「ボールがペーターに渡った!これはシュートチャンスだー!!」

「なかなかいい連携プレーですね。」

ペーターにボールが渡ると、ペーターの背後にいくつもの発射台の様な物が現れた。

「真アサルトシュート!!」

ペーターのシュートと同時に発射台に入っていたボールが飛び出す。

「ペーターの強烈なシュートがジ・オメガのゴールに降り注ぐ!!」

「ザ・イージス!!」

バイスは技を発動させてペーターのシュートを全て防いだ。

「キーパーバイス止めたー!!」

「テレスも顔負けのディフェンスですね。」

「ゼファー!!」

「よし!!」

「ここでゼファーにボールが渡った!!」

「真ゴッドブレス!!」

「ゼファーのロングシュート!止められるか!?!」

「真シュートラップ!!おうおおおお!!」

「ゴール!!ジ・オメガ追加点!勢いが止まりません!!」

「ここで試合終了のホイッスル！！15対0でジ・オメガ、勝利です！！」

試合終了後、アイリスはライオコット島の病院に来ていた。

「オメガに勝ったって報告しよ」

その時オメガは医者の所に行っており、アイリスはそこに向かっていた。

アイリスはオメガのいる部屋の前に来たが、何やら話をしているみたいなので中には入らなかった。

そんな中、部屋の中の会話が聞こえてきた。

「先生、どうですか？」

「凄い回復力だ。もう動いても大丈夫、だがあまり無理はするな。」

アイリスは何のことかと思っていた。

「何度も言うようだけど、無理をし過ぎると命にかかわってくるよ？」

「!!」

アイリスは声を上げずに驚いた。

「分かってます。それでは。」

オメガはそう言って部屋から出てきた。

「オメガ……。」

「アイリス、来てたのか。」

「……ねえ」

「なんだ？」

「命に関わるって、どういうこと？」

「……聞いてたのか。」

「……うん。」

「皆には黙っててくれないか？」

「でも!!」

「余計な心配をかけたくはない。」

「でも……」

「頼む。」

「……………」

アイリスはただ黙りこむことしかできなかった。

41話

「次の対戦相手が決まったぞ〜。」

合宿所の一室で、アレキは言った。

「「どこなの？」」

「イギリス代表のナイツオブクイーンだ。」

「エドガー達か。」

「向こうもきつと強くなってるんだろっな。」

「たあのしみだあああああ!!」

「ガイア五月蠅い。」

「悪い。」

その時、バルキリーが手を上げた。

「ちよつといい？」

「なんだバルキリー。」

「最近オメガとアイリスの様子が変なんだけど、誰か知らない？」

「さあ？」

「オメガは何かあっても話すことはないだろうし、アイリスは大した問題はないだろ。」

「……………そうならいいんだけど。」

その頃、オメガとアイリスは二人でいた。

「ねえオメガ。」

「なんだ？」

「命にかかわるってどういうこと？」

「医者が言うには普通の人間には体の力をセーブする為に脳にリミッターが付いているらしい。人間の体はリミッターがないと体が限界を迎えるらしいからな。」

「なんでその話？」

「俺にはそのリミッターが存在してないんだ。つまり、俺は常に100%の力を出せる代わりに体の方が限界を迎える、そういうことだ。」

「……………どうして？」

「アイリス？」

「どうしてオメガがそんな目に遭うの？オメガは何も悪いことはやってないよ？」

アイリスは涙を流しながらそう言った。

「……………泣くな、俺はこうなったことを後悔していない。そもそもお前を連れ出した時、普通の子供の力で独房を壊せるわけがないんだ。お前らと会えたのは、これのおかげなんだ。むしろ感謝している。」

「でも……………」

「いいかアイリス。俺はお前達に感謝しているんだ。お前達に会えなかったら今みたいに楽しくはなかっただろうし、今この時が俺は楽しいんだ。」

「オメガ……………」

「そういえば最初に会ったのはアイリス、お前だったな。お前があの手紙を出さなかったら、俺は皆に会ってなかったんだ。だからアイリス、ありがとう。」

オメガはアイリスに向けて有り余るほどの微笑みを浮かべた。

アイリスはその微笑みに顔を赤くした。

「……………それを言うなら私だって……………」

「？」

アイリスはその続きを言おうとしたが、言つのをやめた。

（優勝したらって約束だもんね……………）

「それになアイリス、俺は死ぬつもりなんて毛頭ない。」

「？」

「もし俺が死んだら、お前らが悲しむだろ。俺はお前達に悲しんでほしくないんだ。だから俺は絶対死なない。これは約束であり、誓いだ。」

「……………うん。分かった、絶対守ってよ?」

「ああ、絶対だ。」

42話（前書き）

更新速度を上げるつもりだったのに、予想以上にスローになってしまいました。

42話

「まもなくギリシャ代表、ジ・オメガ対イギリス代表、ナイツオブクイーンの試合が、ここウミヘビ島ウミヘビスタジアムで開始します！」

「久しぶりだな、エドガー。」

「あなた達にリベンジするのを心待ちにしましたよ。」

「こっちも負けるわけにはいかないんだ。悪いが勝たせてもらうぞ。」

「私達も負けるつもりはない。」

ナイツオブクイーン フォーメーション

F W エドガー？ フィリップ？

M F ピーター？ ゲイリー？ エリック？ ポール？

D F ジョニーG？ デービッド？ ランス？ エッジ？

G K フレディ？

ジ・オメガ フォーメーション

F W イヴァン？ オメガ？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？ アスタリ？

D F サーシャ？ ガイア？ ウラヌス？ ゼファー？

G K

バイス？

「さあ、ナイツオブクイーンのキックオフで、試合開始ですー！」

「おや？これは……」

「どういうことでしょう！？エドガーが自陣ゴールに向かって逆走中！一体何を考えているのでしょうか！？」

「上がれ、フィリップー！」

「エドガーとは逆にジ・オメガゴールに迫るフィリップー！」

「そう来るか……。バイス、構えろー！」

「？ああ、分かった。」

「エドガー、自陣ゴール手前で止まり……。まさかこれは！？」

エドガーは両腕を回し、前に飛び回転した。

「真エクスカリバーー！！！」

「エドガー、フィールドを最大限利用したエクスカリバー……！」

「これはかなりの威力です。」

「そしてボールはゴールに向かっていたフィリップのもとへ……！」

「パラディンストライクV3……！」

「最大威力のエクスカリバーに、まさかのシュートチェイン……！これは決まるか……！！？」

「ザ・イージス……！」

バイスの技はいとも簡単にシュートをはじいた。

「な、なんと！？あのシュートを止めた……！！？」

「こ、これは想像以上の力です。」

「なんだと……？」

「ウラヌス……！」

「よし、俺の必殺技を見せてやる……！」

ウラヌスはボールを蹴りあげて空中で4方からボールを蹴った。

「グロリアススカイ……！」

様々な回転が加わったボールは周りにあった雲などを巻き込みゴー

ルへ解き放たれる。

「遙か上空から強烈なシュート!!」

「思わず見上げてしまいました。」

「真ガラティーン!!!!ぐおおおお!!」

「ゴール!!先制したのは、ジ・オメガ!!」

「エドガー、お前達にバイスのキーパー技は崩せない。」

「まだだ!!まだ試合時間は残っている!!絶対に破れない技など存在しない!!」

「それもそうだがな、俺達も全力で行く。」

「試合終了ーーーーー！！47対0で、ジ・オメガ圧勝！！止まらない快進撃！！はたしてこのチームに勝つチームは現れるのでしょうか！？」

「フツ、完敗です。ですがまだ戦うチャンスは残っている。その時にまた。」

「ああつ。」

エドガーが握手しようとした時、オメガの腕はある異変が出ていた。

「悪いエドガー、左腕の方でいいか？」

「？別に構わないが？」

エドガーとオメガは握手をした後、それぞれのチームの方へ戻っていった。

（右腕の感覚があまりない……責めてこの大会が終わるまでは、もつてくれよ……）

43話

「ここ、クジャクスタジアムでは、ギリシャ代表ジ・オメガ対アメリカ代表ユニコーンの試合が行われようとしています！！今試合1番の注目は、復活したフィールドの魔術師、一之瀬一哉！！一之瀬の復帰によって、試合はどうなるのか！？」

「ギリシャ代表キャプテン、オメガとの対決も見物です。」

「お前が一之瀬か。」

「デイルン達から話は聞いてるよ、かなり強いんだってね。試合が楽しみだよ！」

「カズヤが復帰したからには、絶対に勝つ！」

「今日のMEはいつも以上にGIN GINさ！！YEAH~~~~」
「！！！！」

「……………とにかく、お互い全力で頑張ろう！」

「ああ！」

ユニコーン フォーメーション

FW デイルン？ ミケール？

MF ステイプ？イチノセ？ マーク？ ショーン？

「カズヤ！」

「一之瀬、ディランとのパスワークでアスタリのディフェンスを回避！！」

「行くぞ！！！」

一之瀬はボールとともに飛び、背後にペガサスが現れた。

「真ペガサスショット！！！」

「ザ・イージス！！！」

「一之瀬、何とかシュートまで持ち込みましたがバイスのディフェンスが崩せません！」

「ガイア！」

「それなら！」

「一之瀬、すかさずボールを奪取！！！」

「ディラン、マーク！！！」

「ディランとマークが上がっていく！！！」

「真ペガサスショット！！！」

「一之瀬のシュートはディランとマークの間に！！！」

「真ユニコーンブースト!!!」

「これは、一之瀬のペガサスショットに、ユニコーンブーストのシュートチェインだ!!!」

「ザ・イージス!!!うおおおおお!!!」

「バイス、これも止めたああ!!!」

「危なかったぜ……シリウス!!!」

「たあああ!!!」

「一之瀬、インターセプト!!!」

「ディラン、マーク!!!」

「OK!!!」

ディランと一之瀬がマークの横に並び、マークが腕を開くと同時に一之瀬とディランが横に飛びマークの後ろに巨大な狼が現れた。

「『グランフェンリル（G3）!!!』」

ボールを蹴ると同時に狼が走り出す。一之瀬とディランは蹴ったボールを上へ蹴りあげ、そのボールを再びマークがシュートした。

「まだだ!!!」

「一之瀬がボールに追いついた！まさか！？」

「真ペガサスショット！！」

「グランフェンリルにペガサスショットのシュートチェイン！！これは強烈だ！！」

「まだまだ行くぜ！！」

「まさか！！」

「真ユニコーンブースト！！」

「なんと！！グランフェンリルにペガサスショット、さらにユニコーンブーストの2連シュートチェインだー！！！！」

「ザ・イージス！！うわあああ！！！！」

「ゴールー！！ユニコーン、ジ・オメガの無失点記録を止めたー！！！！！！」

「これが一之瀬が加わったユニコーンか……面白くなってきた！！」

44話

「悪いオメガ。点を取られた。」

「気にするな。あれは簡単に止められない、次止めればいい。」

「ああ！」

「さあ、ジ・オメガのキックオフで、試合再開です！」

「もっと点取っていくぞ！！」

「OK！」

「ソル！」

「ジ・オメガのミッドフィルダー、ソルが一人で駆け上がる！」

「通さない！はああああ！！」

一之瀬はブレイクダンスに似た動きを行い、炎を纏った。

「真フレイムダンス！！」

「ヴァルゾダース！！」

「うわあああ！」

「ソル、一之瀬ディフェンスを突破！そのままゴールへ！」

「行くぞ!!」

ソルはボールを空高く蹴り上げ、掌を太陽にかざし、その掌を力強く握りしめた。

「天墜!!」

ソルが手を振り落とすと、太陽光がボールに集約していき、光を纏いながらゴールに向かって落ちてくる。

「ソルの眩い強力シュートが、ユニコーンゴールへ落ちていくー!!」

「くそっ! 眩し過ぎて何も見えない!!」

「キッド!!」

「うわあああ!!」

「ゴール! ジ・オメガ、同点に追いついたー!!」

「なんて威力だ……」

「だがこっちが多く点を取れば俺達の勝ちだ。行くぞ!!」

「再びユニコーンのキックオフ! 一之瀬がジ・オメガのディフェンスを突破していく!」

「ディラン、マーク!!」

「「「グランフェンリル（G3）！！！！」」」

「これはさっきと同じ……」

「「真ユニコーンブースト！！」」

「再び一之瀬がボールに追いつく……」

「真ペガサスショット！！」

「強力な2連続シュートチェイン！！バイス、止めることができるか！？」

「もう1点もやる気はない！！ザ・イージス（G2）！！」

バイスの出した巨大な盾がさらに1層増えた。

「この状況で進化だと！？」

「うおおおお！！」

「止めた！バイス、ユニコーンの強力シュートチェインを粉碎！！」

「くそっ！」

「シリウス！」

「よしっ、ソル、ルナ！行くぞ！！」

「「おお！」」

ソルとルナとシリウスがボールの周りに立ち、中心のボールを同時に蹴りあげる。

そして3人とも飛び、今度は3人とも踵で再びボールを蹴りあげる。

3人は更に高く飛び、ボールに向かい3人同時に踵落としを決める。

「「「コズミックブレイク！！！」」」

「巨星を落とすかのような強烈なシュートが迫る！！」

「させるかよ！ボルケイノカットV3！！」

土門が足を回し、その先で地面から火柱の壁が現れた。

「フラッシュアップV3！！がああああ！！」

「ゴォーール！！ジ・オメガ、新たな必殺技で追加点！」

「ジ・オメガの攻撃が止まらない！！最初の展開で勢いづいたか！？」

「まるで嵐のようですね。」

「ここで試合終了のホイッスル！！ジ・オメガ、13対1でユニコーンを下しました！！」

「まさかまた負けるとは……」

「一之瀬一哉、お前と勝負できてよかった。感謝する。」

「こちらこそ、凄いね、君達！」

「いずれ、また会おう。」

「ああ。」

「なあオメガ。」

「どうした、アスタリ？」

「どうしたんだ？今日はなんか様子がおかしいぞ？」

「きのせいだろ、行くぞ。」

「あ、ああ。」

45話（前書き）

久しぶりの更新です。

結構終盤に近付いてきてるのに、更新スピードが上げられない……。

45話

今日はチームの練習……なのだが、

「オメガ、どうしたんだ？」

オメガのことを気にかけるサーシャ、オメガはベンチに座っていた。

「気にするな……少し疲れただけだ。」

「いやお前が疲れること自体おかしいことだから。」

「俺だって人間だ、疲れる時だってある……。」

「そういうことなのか？」

「そういうことだ。だから早く練習に戻れ。」

「分かったよ。」

そう言ってサーシャは練習に戻っていく。

すると今度はアイリスが近づいてきた。

「オメガ、本当に大丈夫？」

「大丈夫だって言ってるだろ。」

「でも………」

「安心しろ、俺はお前たちを置いて死んだりなんかしないさ。」

「……………」

アイリスは無言でその場を去る。

「……………問題は大会が終わるまで体がもつかどうかだな……………」

オメガはひとり呟いた。

くライオコット島・病院く

「以前より大分体の調子が悪くなってるね。」

そう言ったのは医者だった。

「特に右脚と右腕、骨と神経の損傷が酷い。他の場所にも損傷は見受けられるが、最初に言った箇所以外は大したことはない。」

「そうですか。」

普通に受け答えるオメガ。

「だがこれ以上は本当に命に関わってくる。それでもいいのか？」

「構いません。」

オメガはためらいもなく答える。

「そうか、分かった。私もできる限り助力しよう。」

「ありがとうございます。」

「ジ・オメガ練習グラウンド」

イヴァンはアイリスを呼びだしていた。

「イヴァン、何の用？」

アイリスはイヴァンに聞く。

「アイリス、お前何か知ってるんじゃないか？」

「な、何のこと？」

「しらばつくれるな。オメガのことだ。俺が気付かないとでも思ったか？」

「……………」

黙りこむアイリス。

「一体オメガに何があった？」

「……………ごめん、オメガに言うなって言われてるから……………」

アイリスは悲しそうな顔で答える。

「……………そうか…。なら仕方ない。」

イヴァンは振り返り寄宿舎に戻っていった。

（お前達が話したくないなら、無理に聞くつもりはない……。だが、何かあってからじゃ、遅いんだぞ？）

46話

「本日、此処、コンドル島コンドルスタジアムでは、FFI世界大会予選グループB、リトルギガント対ジ・オメガの試合が行われようとしています！」

「ジ・オメガは現在勝ち点は9、決勝トーナメント進出はほぼ確実と言ってもいい所。対するリトルギガントは勝ち点6、この試合に勝てば、決勝トーナメント進出に1歩リードします。どちらもこの試合で勝てば決勝への足がかりになるでしょう。」

「今日は勝たせてもらっよ、今度こそ僕らは世界一のチームになる！」

ロココは力強く宣言する。

「こつちも負けるわけにはいかない。絶対にな。」

オメガも力強く返す。

「まもなく！試合開始のホイッスルが鳴ろうとしています！」

リトルギガント フォーメーション

FW ゴーシュ？ ドラゴ？

MF シンティ？ ユーム？ キート？ マキシ？

DF ウィンディ？ ウォルター？ ジニー？ マロン？

G K

ロココ？

ジ・オメガ フォーメーション

F W

イヴァン？

オメガ？

M F

ソル？

ルナ？

シリウス？

アスタリ？

D F サーシャ？

ガイア？

ウラヌス？

ゼファー？

G K

バイス？

「リトルギガントのキックオフで試合開始！」

「ドラゴー！」

「リトルギガントのフォワード、ドラゴがゴールに向かって駆け抜けるー！！」

「行くぞー！」

「サーシャー！」

「ジャッジ・サンダーV3ー！！」

「ぐおおおー！！」

「サーシャ、ドラゴのドリブルを封じた!!」

「シリウス!」

「ここでシリウスへのロングパス!」

「させるか!!」

「マキシ、サーシャのロングパスをカットした!」

「止める!!」

「サーシャがマキシを止めに掛かる!!」

「エアライドV3!!」

「何!?!」

「マキシ、エアライドでサーシャのディフェンスを突破した!!」

「ドラゴ!」

「うおお!!ダブルジョーV3!!」

「前より威力が上がってる!!ガイア、援護に回れ!!」

「おお!ガイア・ウォールV3!!」

「ザ・イージス(G2)!!」

「ガイアのディフェンスで威力の落ちたシュートをバイスが弾いた
……」

「オメガ!」

「行くぞ!! 真オメガ・ブースト!!」

「なんとオメガが消えた!? これはいったいどういうことだ!」

……
「イイイイイイイイイイイイ」

「……くる!!」

「イイイイイイイイイイイイ!!」

「タマシイ・ザ・ハンド（G5）!!!!!!!!」

「技と技のぶつかり合い!! なんとというすさまじい威力だ!!!!」

「うおおおおおおお!!」

「……止めた!! ロココ、オメガの強烈なシュートを止めた――!!」

「流石にやるな、ロコ……」

オメガはその場に倒れ伏した。

「オメガ!」

「どうしたんだ!？」

「ジ・オメガのキャプテンのオメガ、突如として倒れました。一体何があったのでしょうか!？」

「救急車を呼んで!! 急いで病院に!!」

「ジ・オメガ、オメガのポジションにパラディンが入るようです。」

「さあ！リトルギガントのゴールキックで、試合再開です！！」

「ジニー！！」

「シンティ！」

「マキシ！！」

「リトルギガント、連続パスで突き進む！！」

「止める！！」

「その前にソルとルナが立ち塞がる！！」

「ゴーシュ！」

「俺が止める！」

「今度はアスタリだ！！」

「真ヒートタツクル！！」

ゴーシュは炎を纏ってそのまま突進した。

「うわああ！！」

「ドラゴ！！」

「うおおおおー!!ダブルジョーV3!!!!」

「今度は止める!!」

ガイアは地面に腕をさし、そのまま地面の一部を持ち上げる。

「グランドブラスト!!」

その地面の一部を放り投げ、蹴り、砕け散った破片をボールにぶつける。

破片にぶつかるうちにボールの勢いは弱まり、地面に転がった。

「ガイア、新必殺技でドラゴのシュートを止めた!!」

「ガイア!!」

「行くぞ、ウラヌス!!」

ガイアは少し上げたボールを下から両足で蹴りあげ、ウラヌスは遙か上空に飛び両足で踵落とした。

「「デイバイドブレイク!!」」

落ちてきたボールをガイアが足を地面に引きずりながら蹴った。

「真グランドクエイク!!!!」

「タマシイ・ザ・ハンド（G5）!!!!!!!!!!」

「ロココ、これもとめたー！ー！！」

「両者、レベルの高い戦いを繰り広げています。」

「ゴッシュー！！」

「おお！行くぞ、ユーム！」

「ああ！！」

ゴッシュとユームは互いにパスをして、徐々にそのスピードを上げていき、

ボールは2つに分裂した。

「デュアルストライクV3！！！！」

蹴られたボールはゴールに向かう軌道の途中で再び1つになった。

「オゾンウォール！！！！」

ウラヌスは上空から足を振り、オゾンの壁をボールにぶつけた。

「一進一退の攻防！！先に先取点を取るのはどっちだー！！！！？」

48話

「前半も残り僅か！先に先取するのはどっちだ！？」

「イヴァン！！」

「シリウスからイヴァンへのパス！」

「うおお！！」

「しかしこれをキートがカット！」

「シンティ！」

「通すか！」

「今度はパラディンがカット！激しいボールの奪い合いだ！！」

「食らえ！！」

パラディンはボールに縦回転を加え、地面を走らせるように蹴った。

「セイバードライブ！！」

「真グランドクエイク！！」

「ウォルター、パラディンのシュートを弾いた！！」

「まだだ！！」

「弾かれたボールの先に、ソルが追いついた！これはフリーだ！！」

「天墜改！！」

「これは決まるかーーーー！！？」

「タマシイ・ザ・ハンド（G5）！！！！！！」

「ロココ、これも止めたーーーー！！」

「マキシ！！」

「ボールがマキシに渡った！そしてそのまま持ち込んでいく！！」

「止めてみせる！！」

「アスタリがディフェンスに向かう！！」

「エアライドV3！！」

「マキシ、アスタリを軽々突破！！」

「ドラゴーーーー！！」

「ダブルジョーV3！！」

「オゾンウォール！！」

「ザ・イージス（G2）！！」

「バースもシュートを止める！！この均衡が崩れることがあるのか！？」

「イヴァン！」

「通さない！」

「イヴァンへのパスが通らない！完全にマークされている！！」

「キート！」

「オゾンウォール！！」

「うわあ！！」

キートはオゾンの壁にぶつかった。

「ウラヌス、キートのドリブルを止める！！ここで前半終了のホイッスル！！0対0のまま、後半へもつれこみます！」

「両チームとも、激しい試合をしていますね。」

「ここで速報です。ジ・オメガのキャプテン、オメガを乗せた救急車はライオコット病院に到着したようです。」

「どうする？イヴァンは完全にマークされてるぞ？」

「でもロココの技を破れるのはイヴァンぐらいだぞ？」

チームを不穏な空気が包む中、

「俺はベンチに下がる。」

「イヴァン！？」

「パラディン、お前も下がれ。ボルテクス、ハデス、お前達が入れ。」

「分かった。」

「どうしてイヴァンが下がるんだ!？」

「このまま俺がフィールドに残っても、マークされ続けたら動きようがない。それなら別の選手を入れてかき乱した方がいい。それに……」

「それに?」

「ボルテクス、アスタリ、ゼファー、お前達の技を組み合わせれば、恐らくロココの技を破ることができる。」

「「「はっ!？」」「」」

イヴァンの話を聞いて、3人は驚く。

「ちょっと待て、俺達は強力技の練習なんかしてないぞ?」

「それがどうした?今までずっと一緒にいたんだ。息を合わせれば、何とかなる。」

「それはそうだが……」

「……………よし、ボルテクス、アスタリ、やるぞ!」

「本気かゼファー!？」

「本気だ。ここで俺達がやらないと、勝つことはできないだろ?やらないよりやった方がいい。」

「ゼファー……」

「…分かったよ、その話、俺も乗った!」

「ボルテクス!？」

「ぶつつけ本番に必殺技を組み合わせで完成させる、それはかなり面白いじゃないか!」

「……それもそうだな、よし、やろう!」

くライオコット島・病院く

「急患だ！早く運べ！！」

オメガは集中治療室に運ばれていた。

それを、オメガを看ていた医者はある男に電話をかけようとしていた。

「……………まさか、こんな形で呼ぶことになるとはね。」

49話

「コトアール代表リトルギガント対ギリシャ代表ジ・オメガ、間もなく後半が始まるうとしています。」

「ジ・オメガはイヴァンとパラディンを下げて、ハデスとボルテクスを投入してきましたが、一体どういった狙いでしょう？」

「さあ、ジ・オメガのキックオフで後半開始です!!」

「ゼファー、アスタリ、行くぞ!!」

「おお!!」

D Fの位置からゼファーが、M Fの位置からアスタリが走ってきた。

「うおら!!」

ボルテクスはボールを足で挟み、回転を加え蹴りあげる。

「はああ!!」

高く蹴り上げられたボールを、今度はアスタリが回転を加え蹴り落とす。

「うおおおお!!」

その落ちてきたボールにゼファーは竜巻を引き連れシュートにうつる。が、しかし、

「うわああ!!」

ゼファーはボールから発せられた暴風で吹き飛ばされた。

「ゼファー、ボールの暴風に飛ばされ、シュートに失敗!!そしてボールはリトルギガントに!!」

「キート!!」

キートはボールを上げて、右脚、左脚の順に蹴り、最後に両足で蹴った。

「ダブルグレネードV3!!」

「ザ・イージス(G2)!!」

「バイス、これをなんなく止める!!」

「ボルテクス!!」

「ボルテクスにボールが渡った!!」

「……行くよ!!」

マキシがそういうと、リトルギガントの選手8人がボルテクスを囲んだ。

「これは!?!」

リトルギガントの選手達はボルテクスを中心に回り始めた。

「必殺タクティクス……サークルプレードライブ……！」

選手達の回転が速くなり、ボルテクスはどんどん自陣に戻されていく。

「ぐっ……！！！」

「ボルテクス、ペナルティエリア前まで戻されてしまったー！！！」

リトルギガントの8人はボルテクスに突っ込み、ユームがボールを奪った。

「ロココー！！！」

「なんとロココ、ここまで上がってきていた……！」

「XブラストV3……！！！」

「ペナルティエリア内からのXブラスト……止められるか……！！？」

「ザ・イージス（G2）……！！！」

ロココのXブラストと、バイスのザ・イージスがぶつかり合う。

「うつつあああああ……！！！」

「ゴ……ー……ル……！先取点は、リトルギガント……！これは大きな――」

点だ――！！！！」

「やったなロココ！！」

「ああ！！」

バイスは拳で地面を叩く。

「くそっ！！」

「バイス、自棄になるな。まだ後半が始まったばかりだ。」

サーシャが声をかける。

「だけど……！！」

「オメガも言ってただろ、次止めればいい。」

サーシャはそう言っ自分のポジションに戻っていく。

「済まない、俺が飛ばされたせいで……」

ゼファーはアスタリとボルテクスに謝る。

「気にするな、最初から出来たら奇跡だ。」

アスタリはゼファーを諭す。

「だけど……」

「それを言ったら俺だって、あいつらのタクティクスでペナルティエリアまで戻されちまった。だから気にすんな！！いくぞ！！」

ボルテクスは自分のポジションに向かって走る。

「……………ああ！！」

ゼファールは一言言って、気合いを入れ直した。

50話（前書き）

更新遅れました。

終わりが近いのか遠いのかなんだかわからなくなってきました。

50話

「さあ、ジ・オメガのキックオフで試合再開です！」

「シリウス！」

「パスを受け取ったシリウスが、ソルとルナと共に上がっていく！
！」

「ソル、ルナ。行くぞ！！」

「「うん！！」」

「ロココ、来るぞ！！」

「分かってる！！」

「「「コズミックブレイク！！」」」

「3人のシュートがリトルギガントのゴールに降り注ぐ！！」

「タマシイ・ザ・ハンド（G5）！！！！！！！！」

「「「いっけーーーー！！！！」」」

「うおおおおお！！！！！！」

「ロココ、ゴールを死守ー！！もはやゴールを奪うことはできないのか！！？」

「ウィンディ!!」

「はああ!!」

ボールとウィンディの間にボルテクス入り込んだ。

「ボルテクス、ウィンディへのパスをカット!!」

「アスタリ!ゼファー!もう一度だ!!」

「「おお!!」」

「アスタリとゼファーがリトルギガント陣地に向かっていく!!」

「おら!!」

ボルテクスは再びボールを足に挟み、先ほどよりも強い回転を加えた。

「アスタリ!!」

ボルテクスは後方に蹴りあげる。

「はああ!!」

アスタリはボールの上から回転を加え、乱回転させる。

「ゼファー!!」

アスタリはそのボールを力強く蹴り落とす。

「うおおおおお!!」

ゼファーは強風を纏ってボールに突っ込む。

しかし、

「うわっ!!」

ボールに触れる直前、ゼファーは強風に吹き飛ばされた。

「ボルテクス・アスタリ・ゼファーの技はまたも不発!!そしてリトルギガントの反撃!!」

「ドラゴ!!」

「させるか!!」

サーシャはパスコースを横切り、ボールを奪い取った。

「サーシャ、パスをカットしドリブルで突き進む!!」

「シリウス!!」

「ボルテクス!!」

シリウスからボルテクスにパスが繋がる。

「今度こそ決めろ!!ボルテクス!アスタリ!ゼファー!!」

「シリウス……………アスタリ！ゼファー！行くぞ！！」

「「おお！！」」

ボルテクスはボールを足で挟み、強い回転を加え、後ろに蹴りあげる。

「アスタリ！」

アスタリは更に回転を加え、ボールを蹴り落とす。

「ゼファー！」

「強風如きが……………ねじ伏せてやる！！うおおおおおお！！」

ゼファーは竜巻を背負ってボールに蹴りを入れた。

「ザ・ディザスター！！！！」

様々な回転が加わったボールは地面を挟りながらゴールに向かう。

「激しい風を纏ったシュートが、リトルギガントのゴールへ突き進むー！！」

「止めてみせるー！！」

「「「行けー！！！！！！」」」

「タマシイ・ザ・ハンド（G5）！！！！！！！！」

「激しい技と技のぶつかり合い！！果たして、勝つのはどっちだ――！！！！？」

「うおおおおお！！！！うわあああ！！！！」

「ゴールー！！ジ・オメガの新必殺技が、ロココのタマシイ・ザ・ハンドを打ち破った――！！！！」

「タマシイ・ザ・ハンドが破られた……………、やっぱり凄いや――！！」

そして、リトルギガントのキックオフで試合が再び始まる。

「ゴーシュ――！！」

「真ヒートタックル――！！」

「うわ――！！」

ゴーシュのタックルにソルは弾き飛ばされた。

「ロココ――！！」

「XプラスV3――！！！！」

「今度は止める――！！」

「ロココのシュートで、勝ち越すことはできるのか――！！！！？」

「ザ・イージス（G3）――！！！！」

バイスの出した盾が、さらに一層厚くなった。

「何!？」

「バイス、ロココのXブラストを粉碎!!ゴールを死守しました!」

「やっぱり面白いや!!次は必ず破ってみせる!!」

そう言つてロココは自分のポジションに戻っていく。

「行け!ボルテクス!!」

ボールがボルテクスに渡る。

「行くぞ!!」

「おお!!」

「おら!!」

「はああ!!」

「「ザ・ディザスター!!」」

「タマシイ・ザ・ハンド(G5)!!!!!!」

3人のシュートがロココの必殺技を突き破った。

「ゴーーーーーール！！ジ・オメガ逆転！！追いぬいたーーーー！！ここで試合終了のホイッスル！！ジ・オメガ、Bグループを制し、決勝トーナメントの切符を手に入れました！！」

「よっしゃーーーー！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125t/>

イナズマイレブン Ω

2011年11月17日19時27分発行